杏林大学

文部科学省　「地（知）の拠点整備事業」平成25年度採択
新しい都市型高齢社会における地域と大学の統合知の拠点

平成27年度　地域交流活動報告書
地（知）の拠点整備事業 成果報告書

発行日　平成28年７月
編集発行　杏林大学　地域交流推進室
〒181-8612　東京都三鷹市下連雀5－4－1
TEL：0422－47－8052　FAX：0422－47－8054
http://www.kyorin-u.ac.jp/univ/society/area2/

印　　刷　(株)ナナオ企画　〒104-0033　東京都中央区新川２－９－９

文部科学省
地(知)の拠点

2015
平成27年度

地域交流活動報告書

地(知)の拠点整備事業
成果報告書

杏林大学

地域交流活動報告書

目次

ごあいさつ 4

学　長　跡見　裕 …… 4

地域交流推進室 室長　古本　泰之 …… 5

地（知）の拠点整備事業に関する社会貢献活動 6

健康分野での地域交流活動 8

肢体不自由者（児）の車いすスポーツ活動参加支援 車いす活動姿勢へのアドバイス …… 8

健康分野でのその他の主な地域交流活動（一部掲載） …… 9

教育分野での地域交流活動 10

幼児と保護者を対象とした性教育 …… 10

八王子市内での地域イベントの活性化活動を通じた地域振興教育 …… 10

教育分野でのその他の主な地域交流活動（一部掲載） …… 11

地域活性化分野での地域交流活動 12

地域清掃活動その他の地域交流活動を通じた地域貢献の可能性について …… 12

鎌倉浄智寺写真供養感謝祭の企画・運営 …… 12

Discover “Hachioji Hamura Mitaka” …… 13

JR東日本八王子支社・八王子市役所との連携による「駅からハイキング」プログラムの作成 …… 14

御岳山外国人誘致プロジェクト …… 14

秋田県湯沢市・秋の宮温泉郷との連携協定に基づく活動に参加 …… 15

地域活性化分野でのその他の主な地域交流活動（一部掲載） …… 16

その他の分野での地域交流活動（一部掲載） 16

本学と羽村市・三鷹市・八王子市との連携 …… 17

ごあいさつ

地域交流活動の成果を
教育・研究・社会貢献として全学的に発展

学長　跡見　裕

杏林大学が進めている「地域交流」は、総合大学としての特長を活かして健康・福祉、地域活性化、防災などさまざまな分野に渡っております。これらの遂行に関しては、平成25年に設置した杏林CCRC研究所や地域交流委員会をはじめとした教職員の多大な努力はもとより、それにもまして地域の皆さまの教育・研究活動へのご協力が必要であります。常日頃から、協働していただいている地域関係者、特に東京都三鷹市・八王子市・羽村市の皆さまに、心よりお礼申し上げます。

これまでの取り組みの成果が結実する形で、「新しい都市型高齢社会における地域と大学の統合知の拠点」というテーマで平成25年度文部科学省「地（知）の拠点整備事業」に採択され、東京都三鷹市・八王子市・羽村市の皆さまとの密接な連携活動が始まってから３年が経過致しました。今回の事業は、「生きがい創出」「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」の３分野を軸に、本学のこれまでの地域交流活動を、教育・研究・社会貢献の面において全学的に発展させていくものです。３年を経過し、連携３自治体との関係強化に加え、地域志向教育研究費を通じた「研究」、全学必修科目「地域と大学」に代表される「教育」、地域活動支援事業費を通じた「社会貢献」の各分野において、さまざまな地域志向活動が本格化しております。本報告書は、「地（知）の拠点整備事業」の成果報告を中心として、平成27年度における本学の地域交流活動の全体像をお示しするものとなっております。できるだけ多くの方にご覧いただき、本学の地域交流活動をご理解いただくとともに、積極的なご意見を本学にお寄せいただければ幸いです。

昭和41年に三鷹市新川に開設された杏林学園は平成28年11月に創立50周年を迎えます。また、平成28年４月には保健学部・総合政策学部・外国語学部の３学部の拠点となっていた八王子キャンパスから、新たに井の頭キャンパス（三鷹市下連雀）への移転が完了し、新たな50年に向けたスタートを切りました。

この転換期において、本学は医学・保健医療系と人文・社会科学系を有する総合大学として、さらに地域との連携に力を入れて参りたいと考えております。なにとぞ本学の活動に引き続きのご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

キャンパス移転を通じて武蔵野地域の
総合大学として新たな取り組みを推進

地域交流推進室 室長　古本　泰之

近年、地域に密着した大学の姿がさまざまな場で議論されておりますが、本学においても1970年の創立以降、さまざまな場で「健康」を軸とした教育・研究・社会貢献活動を行って参りました。それらの取り組みを加速して本学の独自性ある教育につなげるべく、2006年に地域交流委員会、2012年に地域交流推進室を設置し、さまざまな場面で地域と連動した活動を行っております。

その中で、2013年度「地（知）の拠点整備事業」に「新しい都市型高齢社会における地域と大学の統合知の拠点」というテーマで採択され、2015年度で３年を経過致しました。この事業に伴って設置した杏林CCRC研究所（蒲生忍所長）を中心とするこれまでの各種事業の実施は、本事業の連携パートナーである東京都三鷹市・八王子市・羽村市の地域の皆様のご協力無しでは成立することはなく、心より感謝申し上げます。

2015年度の教育面での地域志向活動においては、2014年度より開講した１年生必修科目「地域と大学」について、保健学部への拡大を含めた内容の改善を図りました。合わせて外国語学部において「プロジェクト演習」（２年次科目）を新たに設置するなど、地域課題に取り組むPBL（Project / Problem Based Learning）形式の科目の充実を進めました。また「生きがいづくりコーディネーター」講座も2014年度に引き続いて開講し、地域の方々とともに地域課題の解決に取り組む体制を構築しました。また、社会貢献活動としては、地域交流活動支援事業・地域活動助成費を通じて、「子育て支援」「健康づくり」「減災」「生きがい創出」といった多様なテーマに基づいた教職員の取り組みへの支援を行い、その活動に学生がボランティアとして参加することで、教育活動との連動を展開しました。

2016年４月には井の頭キャンパスが三鷹市下連雀に開設され、４学部の距離がより近くなりました。これまでの八王子キャンパスでの保健学部・総合政策学部・外国語学部の取り組みを継続するとともに、この移転を通じて、武蔵野地域における総合大学として特徴ある新たな取り組みを進めて参りたいと考えております。

本報告書をご一読いただき、本学へのさらなるご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

地(知)の拠点整備事業に関する社会貢献活動

平成27年度の「地(知)の拠点整備事業」における社会貢献活動は、「健康寿命延伸」「生きがい創出」「災害に備えるまちづくり」の３分野において、10件の活動を実施しました。活動の具体的な内容については、「詳細ページ」をご覧ください。

分類	活動名	担当者	活動場所	活動内容	詳細ページ
健康寿命延伸	**「生涯スポーツの機会提供」プログラム**	石井博之 保健学部 理学療法学科 准教授	八王子キャンパス 羽村市	羽村市の住民を対象に、運動能力の評価を行った上で、体重管理や体力増強など個々の運動目的に合わせたプログラムの提案やアドバイスを行い、運動の継続や健康寿命の増進を図った。運動の多様性を紹介しながら、継続的に運動できるようになることを目的として、「歩こう会」を開催し、ポールウォーキングやノルディックウォーキング体験会を行った。	33
	障がい者スポーツの普及・参加支援	一場友実 保健学部 理学療法学科 講師	三鷹キャンパス 松田記念館	障がい者スポーツ「ボッチャ」を地域の方々に広く知ってもらうために、パラリンピック出場選手による講演会と試合の実演をしていただいた。参加者にも実際の競技を体験していただき、本学参加学生は競技の審判として配置し、競技補助を行った。	34
	「平岡町わくわく健幸教室」のフォローアップ	榎本雪絵 保健学部 理学療法学科 准教授	八王子市 平岡町	自主運営化した「平岡町わくわく健幸教室」は月１、２回開催した。今年度はフォローアップとして６回参加し、加齢変化と高齢者に適した運動についての健康講座の実施、実践している体操の確認と修正（DVDの提供）、定期的な体力測定の実践、参加者へのリーダー研修（運動指導の方法）などを行った。	34
	市民と多職種で地域包括ケアを考える参加型ワークショップ「たまケアLive」の企画と運営	柴崎美紀 保健学部 看護学科 講師	三鷹市 八王子市	これまでの活動で得られた資料を基に、〈たまLANプロジェクト！どうする？ DOする！〉というテーマでワークショップを開催し、「自宅で暮らせなくなったらどうする？」「わからなくなったらどうする？」「食べられなくなったらどうする？」「歩けなくなったらどうする？」という４つのテーマについてのシンポジウムと、参加者の居住地域で区分けしたグループによるワールドカフェを行った。	35
生きがい創出	子育て支援プログラム 1 **多胎育児支援活動**	太田ひろみ 保健学部 看護学科 教授	三鷹キャンパス	多胎妊娠中の妊婦やその家族が医療・看護の専門職や多胎育児経験者と交流を持ち、多胎児特有の不安や問題の解決を図ったり、多胎児の親同士が交流したりすることができる場を提供することを目的として、「多胎育児準備クラス」を企画・運営した。年１度開催の多胎育児家庭の交流会「ツインズマーケット」では、小児科医師の講演会とグループワークを行った。	36

分類	活動名	担当者	活動場所	活動内容	詳細ページ
生きがい創出	子育て支援プログラム 2 **極低出生体重児の育児支援サークル「ぴあんず」**	吉野　純 保健学部 看護学科 准教授	三鷹キャンパス	1800g未満で出生し、NICU／GCUを退院した子どもとその家族を対象とする育児支援活動の一環として、親同士が情報交換したり、NICU看護師、医師からアドバイスを受けたりすることができるフリートークを２回開催した。10月には「発達支援についての勉強会」を開催し言語療法士と理学療法士による講義がなされ、活発な意見交換を行った。	36
	住み慣れた地域で過ごすための「在宅・あぷりこツーカーチーム（仮称）」作り	大金ひろみ 保健学部 看護学科 准教授	三鷹市	在宅移行したケースについて訪問看護ステーションとの合同カンファレンスを行った。また、退院支援リンクナースや病棟の看護師等に、訪問看護ステーションの訪問看護に同行させてもらった。さらに、講師を招いて「『伝える力・聴く力』の可能性を再確認！！人の暮らしを丁寧に見つめ、つながりを大切にする！」をテーマに、退院支援公開講座、退院支援リンクナース研修、公開講演会を開催した。	37
	杏林大学・三鷹ネットワーク大学共催「私の案内書作り」講座	兎澤恵子 保健学部 看護学科 教授	三鷹市 三鷹ネットワーク大学	高齢になるにつれて物忘れや体力の低下が進むため、まだ元気なうちに今までの自分を振り返り、「私の案内書」としてまとめることは非常に大事なことである。そこで、３回にわたり「私の案内書作り」講座を開催し、その目的と意義、自分の行動や価値観を規定している自分らしさの再確認の仕方、エッセイの書き方などを通して学んでもらい、実際に作ってもらう活動を行った。	38
災害に備えるまちづくり	防災ふれあいフェア等防災プログラム 1 **防災ふれあいフェア**	千田晋治 保健学部 救急救命学科 講師	八王子キャンパス	本学の教育・研究を訓練の場に活かし、家族で楽しみながら防災意識を高めてもらうことを目的として、八王子消防署との共催による「防災ふれあいフェア～家族で楽しむ防災訓練～」を開催した。看護学科「備えて安心親子で防災」、外国語学部「やさしい日本語」、総合政策学部「大地震！あなたはどうする？」、理学療法学科「運動と健康相談」、救急救命学科による起震車体験、放水訓練、初期消火訓練の指導などを行った。	39
	防災ふれあいフェア等防災プログラム 2 **BLS指導等による実践的な災害対応能力の向上**		八王子市	八王子消防署の要請により、消防署主催の救命講習や応急手当普及指導に出向した。その対象は八王子市消防団員、八王子市役所職員、八王子市女性防火協会会員などである。また、加住中学校教員、美山小学校教員に心肺蘇生法及びAEDの使い方を指導した。	40
	防災ふれあいフェア等防災プログラム 3 **第66回全関東八王子夢街道駅伝競走大会における応急救護活動等への参加**		八王子市	本学を代表し、八王子消防署と連携の下、救護所における応急救護及び走路におけるＡＥＤ救護等を担当。大会参加者の安心と安全の確保を図ることを目的に実施した。	41

健康分野での地域交流活動

保健学部　理学療法学科

肢体不自由者（児）の車いすスポーツ活動参加支援
車いす活動姿勢へのアドバイス

指導教員名　芝原 美由紀　　学生代表者　大島 佳紀（保健学部）

■概　要

●**第20回ハマピック大会　第15回全国障害者スポーツ大会の予選会サポート支援**
（横浜市三ツ沢公園陸上競技場　平成27年５月６日・学生２名参加）
　障がい児車椅子陸上チーム「ラストラーダ」が参加する大会においてボランティアを行った。

●**障がい児車椅子陸上チームの練習への参加**
（横浜リハビリテーション事業団横浜ラポール　平成27年５月９日・学生４名参加、その他９月、10月に学生各４名参加）
　障がい児車椅子陸上チーム「ラストラーダ」の練習に参加した。

●**学生による「ボッチャ」体験事業**
神奈川県立保健福祉大学体育館
（平成27年11月28日・学生９名参加）
戸山サンライズ　Noble Wings 佐藤敏英
（平成27年12月19日・学生13名参加）
荒川総合スポーツセンター
（平成28年２月20日・学生13名参加、２月21日・学生15名参加）

●**切断者の陸上競技への参加**
東京都障害者スポーツセンター
（平成28年２月６日・学生７名参加）
切断者陸上チーム「ヘルスエンジェルス」に参加した。

■ねらい

●理学療法士としての障がい者スポーツへのかかわり方を学ぶ。
●障がい者スポーツの支援を通じて、運動障がいがあってもスポーツで身体を動かす楽しさを地域社会が支える意義を理解する。

■成　果

●ハマピック大会では、障がい者選手のモチベーションの維持と向上に理学療法士として取り組む重要性を学んだ。
●車椅子の利用者が体育館を利用してスポーツをするときの、環境整備や準備にも数多く参加し、重症心身障がい者に対しては、体調管理や車椅子、杖、補装具の配慮をしながら実施しなければならないことを学んだ。

車いす陸上：準備体操を一緒に参加

健康分野でのその他の主な地域交流活動（一部掲載）

No.	行　事　名	実施期間	活動主体
1	羽村 骨太教室 運動編「みんなでコツ骨 運動のススメ」	平成27年５月１日	保健学部
2	第２回杏林医学会市民公開フォーラム 「脳卒中治療・予防・そしてリハビリテーション」	平成27年５月９日	医学部・杏林医学会
3	第17回東京都脳卒中市民公開セミナー	平成27年６月６日	医学部
4	看護週間	平成27年６月17日～19日	医学部付属病院
5	平成27年度 世田谷区青少年地区委員会 合同研修会 講演	平成27年６月20日	医学部
6	第10回三鷹市民公開講座 「腎臓について考えるフォーラム」	平成27年６月	医学部・医学部付属病院
7	世田谷区精神保健講演会 「家族が元気になる統合失調症 勉強会」	平成27年７月14日	医学部
8	三鷹市運動相談事業	平成27年７月末～８月前半	医学部・保健学部
9	三鷹市医師会 平成27年度 三鷹市中高年者の 運動相談事業「メディカルチェックと運動処方」	平成27年８月３日～８月６日	医学部・保健学部
10	世田谷区玉川区民精神保健講演会 「統合失調症の理解と関わり方のコツ」	平成27年８月19日	医学部
11	市民公開講座「ピロリ菌と胃がんリスク健診」	平成27年９月12日	医学部
12	杏林大学医学部付属病院と 三鷹市老人クラブ連合会との合同行事 健康長寿講演会	平成27年９月15日 平成28年２月24日	医学部・医学部付属病院
13	第16回糖尿病予防講演会	平成27年９月26日	医学部・医学部付属病院
14	支援者のための講演会「腑に落ちる発達障害」	平成27年10月28日 平成28年１月26日	医学部
15	福生ふれあいフェスティバル	平成27年11月１日	医学部・医学部付属病院
16	脳卒中の早期発見および予防に関するシンポジウム	平成27年12月12日	医学部
17	新宿区家族教室 「家族が統合失調症と診断された方のために」	平成28年１月22日	医学部
18	海上技術研究所 メンタルヘルス研修会 講演	平成28年２月17日	医学部
19	三鷹市難病検診	平成28年２月20日	医学部
20	栄養学の観点から学ぶじゅんさい料理講習会	平成28年２月21日	保健学部
21	健康推進講演会	平成28年２月24日	医学部・医学部付属病院
22	シニア健康講座	平成28年３月12日	医学部付属病院

保健学部　看護学科 看護養護教育学専攻母子看護学

幼児と保護者を対象とした性教育

指導教員名　佐々木 裕子　　学生代表者　山田 美穂（保健学部）

■概　要

●小金井市ひなぎく保育園と八王子市子どもの家八栄寮の２つの施設で、それぞれ平成27年８月27日と９月26日に「いのちのおはなし会」を実施し、その後、保護者および教職員との意見交換を行った。

●また、幼児の性に関する質問へのワンポイントアドバイスとして作成した小冊子「子どもからの性の疑問にどうこたえる」を参加した子どもの保護者全員に配布した。小金井ひなぎく保育園（平成27年８月27日・学生６名参加）八王子市子どもの家八栄寮（平成27年９月26日・学生４名参加）

■ねらい

●子ども達がいのちの大切さと自分自身を守ることを知ること、保護者が子どもの質問に真摯に向き合い、保護者自身も性に関することを大切に考えるきっかけづくりを目指す。また、参加する学生にも、自分自身を振り返る機会にしてほしいと考えている。

■成　果

●子どもたちの話を聞く表情は、真剣そのものであった。幼児に性の話をするのはまだ早いと思っていた保護者も「いのちのおはなし会」を通して、命の大切さや自分の体を守るお話が幼児に必要である理由を理解してくれた。また、学生も改めて性とは何かを考え、自分自身を振り返る機会を得て、次年度もこの活動を継続していくことに意欲を見せている。

胎児人形を抱っこしている園児

外国語学部　古本泰之ゼミナール

八王子市内での地域イベントの活性化活動を通じた地域振興教育

指導教員名　古本 泰之　　学生代表者　平山 將成（外国語学部）

■概　要

●八王子市の「ユーロード」にて年２回実施される「八王子古本まつり」に、古本ゼミナール３年生が運営団体の「八王子古本まつり実行委員会」と共同で、イベントの活性化活動に取り組んだ。

●このイベントは単なる古書販売だけではなく、著名人による講演会なども行われる総合的な文化イベントである。［年間２回　学生約30名参加］

■ねらい

●地域振興に関する学内での学びをさらに深め、八王子市の地域活性化に貢献する。

●昨年度より参加し、「古本まつり」の事前準備・当日運営に参加し改善提案を行っている。今年度は年間２回の取組とする。

■成　果

●地域振興に関する学内での学びを現場で深めることができた。

●地元のイベントに主体的に参加することができた。

八王子のまちづくりに関するアンケート調査

教育分野でのその他の主な地域交流活動（一部掲載）

No.	行　事　名	実施期間	活動主体
1	認知行動療法の基本	平成27年５月26日	医学部
2	三鷹・武蔵野リハビリテーション連絡会 合同研修会	平成27年６月13日	医学部付属病院
3	第６回 リウマチ膠原病教室	平成27年７月18日	医学部・医学部付属病院
4	特定非営利活動法人 三鷹ネットワーク大学 「民学産公」協働研究事業 〈三鷹ネットワーク大学市民講座「私の案内書作り」〉	平成27年８月14日～ 平成28年２月28日	保健学部
5	羽村市平和啓発講演会 「平和のために言葉のできること」	平成27年８月15日	外国語学部
6	夏！体験ボランティア2015 in みたか	平成27年８月17日～ ８月21日	医学部付属病院
7	羽村日本語学習会《日本語の教え方講座》	平成27年８月29日	外国語学部
8	自治医科大学 医学部講義 「精神医学で読み解く漫画の世界」	平成27年９月17日	医学部
9	相模女子大学「メンタルヘルス」講義	平成27年９月～平成28年１月	医学部
10	第31回 日本ストレス学会学術総会・ 市民公開講演会	平成27年11月８日	医学部
11	第165回 日本体力医学会関東地方会・ 市民公開講演会「サクセスフルエイジングのために」	平成27年11月28日	医学部
12	平成27年度 三鷹市医師会産業医学講習会	平成27年12月19日	医学部
13	食育体験学習「自分たちで作るお昼ごはん」 ～煮魚にチャレンジしてみよう！～	平成28年２月16日	保健学部
14	羽村日本語学習会 《日本語支援ボランティア入門講座》	平成28年２月27日	外国語学部
15	いちょう塾へ科目提供 大学コンソーシアム八王子 単位互換制度へ科目提供	通　年	総合政策学部
16	羽村市在住外国人対象日本語学習支援	通　年	外国語学部
17	地域教育シンポジウム	平成27年８月７日 平成27年10月５日 平成27年11月10日 平成28年１月16日	保健学部・総合政策学部・外国語学部

地域活性化分野での地域交流活動

総合政策学部　Mitaka Kichijoji Project

地域清掃活動その他の地域交流活動を通じた地域貢献の可能性について

指導教員名　藤原 究　　学生代表者　小山 雄二（総合政策学部）

■概　要

- 三鷹駅、吉祥寺駅周辺の生活道路を中心に清掃活動を１年間を通じて行った。
- こうした清掃活動を通じた地域再発見の活動も４年目を迎えており、今後も継続していく予定である。
（年間を通して、学生21名参加）

■ねらい

- 地域住民の生活環境向上に貢献する。
- 地域交流活動に活かすべく、アイデアを検討する。

■成　果

- 清掃活動を通じて、新キャンパス周辺の店舗などについて、学生にとって有益な情報を収集し、マップを作成した。
- このほかに交通上の危険箇所について検討を行い、交通ハザードマップの作成にも取りかかっている。

三鷹駅周辺の清掃活動

外国語学部　観光交流文化学科 宇佐美ゼミナール

鎌倉浄智寺写真供養感謝祭の企画・運営

指導教員名　宇佐美 貴浩　　学生代表者　八ツ田 翔太郎（外国語学部）

■概　要

- 平成27年11月14日、宇佐美ゼミナール３年生15名が「鎌倉浄智寺写真供養感謝祭」に参加した。この感謝祭は、鎌倉瑞泉寺で17年間続けられてきたものだが、平成26年より北鎌倉浄智寺に場所を移して新たに開催されているものである。
- 宇佐美ゼミナールは、当該イベントにおいて企業への協賛依頼、現地自治体との調整、ポスターやSNSによる広報活動、および当日のイベント参加者への対応など当該イベントの企画・運営全般を実施した。

■ねらい

- 毎年11月第２土曜日に開催し、数年後には鎌倉の観光イベントとして定着させ、地域活性化を促進し、さらには東日本大震災における持ち主不明の被災した写真を御焚き上げすることにより、復興のお手伝いをする。
- 地域振興に関するプロジェクトの実現過程を体験し、地域の人と文化と産業が共生していくことの大切さを学ぶ。

■成　果

- 約100名の参加者が、自然あふれる浄智寺の境内で写真の御焚き上げを体験し、心豊かな時間を共有することができた。
- 地域振興に関するプロジェクトを成功させるための知識と技術を身に付けることができた。また、地域活性化には地域の人と文化と産業の密接な協力関係が必要であることを学んだ。
- 本学外国学部観光交流文化学科の存在を知らしめ、地域活性化に関する活動に貢献していることをPRできた。
- 現場での学びや地域自治体・企業および地域の人々との交流は、参加した学生にとっては貴重な体験となった。

御焚き上げの様子

外国語学部　坂本ゼミナール

Discover “Hachioji Hamura Mitaka”

指導教員名　坂本 ロビン　　学生代表者　太田 益輝（外国語学部）

■概　要

- ゼミナールのメンバーを３つのチームに分け、八王子市、羽村市、三鷹市においてフィールドワークを行い、外国人観光客に向けた情報提供について調査を行った。
（坂本ゼミナールの学生15名参加）

[八王子市]

- 多くの外国人が訪れる高尾山で、登山を終えてきた外国人観光客に道案内の標識や警告表示、神社での作法に関する案内や、登山をするうえで分かりにくかったことなどについてインタビューした。

[羽村市]

- 市民から愛されている羽村市動物公園を外国人観光客にも楽しんでもらえるよう調査した。

[三鷹市]

- 三鷹市観光案内所での情報収集、レンタサイクルを用いての市内調査、国立天文台、星と森と絵本の家などの調査を行った。

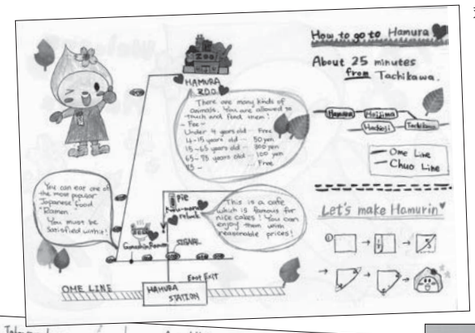
■ねらい

- 外国人観光客に３市の魅力を伝えるためには、どのようなことをすれば良いのかを調査・考察する。
- 外国人観光客に満足してもらえる街づくりをするには、どのような情報提供が必要か調査する。

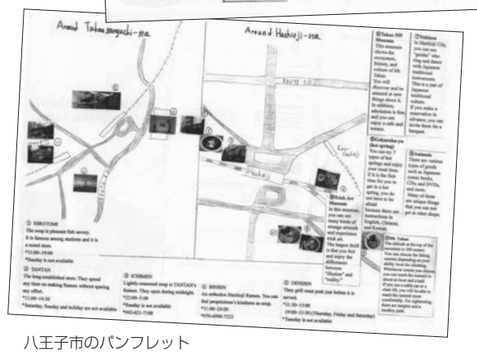
■成　果

- 集めた情報を基に、手作りのパンフレットを作成した。

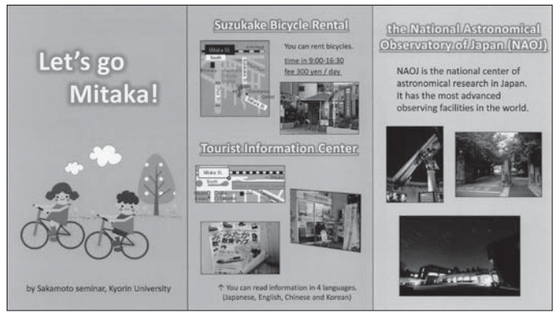
作成した手作りのパンフレット



羽村市のパンフレット



八王子市のパンフレット



三鷹市のパンフレット

外国語学部　志村良浩ゼミナール

JR東日本八王子支社・八王子市役所との連携による「駅からハイキング」プログラムの作成

指導教員名　志村 良浩　　学生代表者　加藤 佑紀（外国語学部）

■概　要

●JR東日本の『学生が考えた「駅からハイキング」』のプログラムの企画・立案に向けて、１つ１つプロセスを踏みながら、平成27年７月７日から平成28年３月４日までの間に計７回にわたり活動した。
●具体的には、１回目のJR東日本八王子支社、八王子市産業振興部観光課、八王子観光協会との会議から始まり、候補地の実踏調査、候補地の絞り込み、コースの最終案策定のためのデータの収集、コースの最終決定、実施に向けた最終打ち合わせ・シミュレーションまでを行った。
（志村ゼミナールの学生16名参加）

■ねらい

●JR東日本としての要望・条件、八王子市の要望や現在の観光振興活動実態を把握したうえで、学生ならではの視点で、JR東日本・八王子駅を起点として多くの人に楽しんでもらえるハイキングコースを新たに作る。

■成　果

●JR東日本・八王子駅～都立小宮公園～道の駅八王子滝山～滝山城址公園～JR東日本・八王子駅というハイキングコースを企画・立案することができた。
●道の駅における飲み物割引クーポンの発行など、おもてなしに関する調整事項も確定できた。

ハイキング候補地の実踏調査

外国語学部　高木眞佐子ゼミナール

御岳山外国人誘致プロジェクト

指導教員名　高木 眞佐子　　学生代表者　和栗 篤（外国語学部）

■概　要

●平成27年９月25日、10月23日、11月13日、11月27日の４回にわたり、青梅市御岳山特設ステージで行われた「天空芸者ナイト」の第２弾のサポートを行った。
●学生には、ボランティアとして１人当たり１回から２回、全体としては４回の「天空芸者ナイト」のサポート活動をしてもらった。
●学生の具体的な活動内容は以下の通り。
①芸者の方々が踊りや芸を披露する際の舞台設営の手伝い
②ストリーム撮影
③英語が必要とされる際の案内通訳
④終了後、外国人を含めた参加者の方々への満足度アンケートを実施
⑤すべてのイベント終了後、地域活性化に向けた提言を作成
（高木ゼミナールの学生10名参加）

外国人にアンケートを実施するゼミ生

終了後、芸者の方々と記念撮影

■ねらい

●御岳山商店組合と本ゼミナールとの結びつきを活用して地域交流活動を行う。
●青梅市御岳山の地域活性化のために始められた「天空芸者ナイト」をサポートすることによって、外国人の誘致の促進に寄与する。

■成　果

●各回において、終了後に学生自身にも「天空芸者ナイト」の内容についての感想を聞き、今後、どのようにして外国人誘致活動をしていくべきか、ブレインストーミングをしてもらった。
●交通の便、知名度の問題などが浮き彫りになったが、学生ならではの若々しい視点での独創的な提案もあり、大学が取り組む地域活性化プログラムとしては有益な成果をあげることができた。

外国語学部

秋田県湯沢市・秋の宮温泉郷との連携協定に基づく活動に参加

指導教員名　古本 泰之　井手 拓郎　　学生代表者　土屋 佳奈（外国語学部）　廣瀬 明実（外国語学部）

■概　要

●秋田県湯沢市「秋の宮温泉郷イメージアップ推進協議会」と本学外国語学部では、協働で観光まちづくりの活動に取り組んできており、平成24年には「まちづくり・観光事業に関する連携協定」を締結した。これらの活動の一環として、本年度は以下の２つの「フィールドスタディ」（外国語学部科目）に取り組んだ。
●観光振興に関する現地調査と意見交換
（平成27年８月６日～９日・学生７名参加）
湯沢地域において新たな観光資源として注目を集めている「ジオパーク」や、秋田県立雄勝高等学校学生との協働でのイベント補助・グリーンツーリズム体験などを行い、湯沢地域の観光の現状を把握したうえで、最終日に関係団体との意見交換会を実施し、観光振興への提言を行った。
●第18回かだる雪まつりへの参加
（平成28年２月11日～15日・学生17名参加）
秋の宮温泉郷で行われるイベントであり、本学学生の参加は今回で８回目となる。例年同様、秋の宮温泉郷の皆さま、秋田県立雄勝高等学校学生や県内外からの家族連れとの積極的な交流を行った。その中で学生は、雪まつりの会場づくりから当日の実施連営、片づけまでをスタッフとして関わり、雨天の中約3,000個のミニかまくらに明かりを灯し、会場を盛り上げることができた。

■ねらい

●秋の宮温泉郷との連携を推し進め、イベントの運営支援に携わりながら、交流を図ることにより、地域と本学の双方が、お互いを高め合う関係を続けていく。同時に現地との交流を通じて観光による地域振興活動を学ぶ。

■成　果

●秋の宮温泉郷地域にとっては、今回を含め、これまで継続してきた本学との連携事業を通じて、地元価値の再評価を促す機会の一つとなっている。
●学生にとっては、キャンパスとは違う現場での学びや、地域住民・高校生・自治体・観光団体の方々との交流は、コミュニケーション力や問題発見・解決力の向上、また、新しいことへチャレンジする勇気を養うことができた。

秋の宮温泉郷の方々と一緒に作ったミニかまくら

ミニかまくら上空に上がる雪花火

秋の宮温泉郷の方と一緒に作業する学生

地域活性化分野でのその他の主な地域交流活動（一部掲載）

No.	行　事　名	実施期間	活動主体
1	埼玉回生病院・第５回特別講演「地域包括ケアの実現に向けた多職種協働と住民参加を考える」	平成27年９月19日	医学部
2	三鷹国際交流フェスティバル	平成27年10月４日	外国語学部、地域交流推進室、地域交流課
3	多職種交流会 市民フォーラム	平成28年２月20日	医学部付属病院

その他の分野での地域交流活動（一部掲載）

No.	行　事　名	実施期間	活動主体
1	保健学部 華道同好会 合同華道会	平成27年５月１日	保健学部
2	三鷹医師会 学術講演会 講演	平成27年６月10日	医学部
3	三鷹キャンサーネット	平成27年７月30日 平成27年12月３日 平成28年３月31日	医学部
4	西東京医師会学術講演会 講演	平成27年９月15日	医学部
5	調布市医師会学術講演会 講演	平成27年12月８日	医学部
6	八王子市消費者生活センター SNS悪徳商法注意喚起クリアファイル作成	平成27年秋から	総合政策学部
7	幼児及び障がい者・高齢者の生きがい創出活動	通　年	保健学部、吹奏楽団有志

特別養護老人ホームのクリスマス会に本学の吹奏楽団が出演
楽しいひとときを過ごしました

高齢者の方もステージに出て参加

敬老祝賀式にも参加。イベントを大いに盛り上げました

本学と羽村市・三鷹市・八王子市との連携

羽村市・三鷹市　**活力ある地域社会の創造、人材育成など**
八　王　子　市　**生涯学習推進、外国人留学生の支援など**

本学は東京都羽村市と三鷹市において、相互の資源および研究成果等の交流を促進することによる活力ある地域社会の創造や人材育成などを目的として、前者とは平成22年６月に、後者とは平成25年９月に包括的な連携に関する協定を締結した。この包括連携協定は教育、生涯学習、まちづくり、地域の産業・文化の振興、健康・福祉等の分野において連携し協力していくものである。また、八王子地域は25の大学・短大・高専がある学園都市であり、本学は平成21年４月から大学コンソーシアム八王子に加盟し、生涯学習の推進や情報の発信、学生と市民との交流、外国人留学生の支援などの事業に取り組んでいる。

羽村市

平成27年度は42の事業を連携した。羽村市立中学生を対象としたBLS（一次救命措置）等救命救急講習会への講師派遣、生涯スポーツの機会提供プログラム、商店街活性化事業など継続的に実施されている事業活動は充実し、杏林・羽村コモンズや商店・観光振興および若者地域活性化事業など新規内容も加わった。

羽村市立中学校での BLS 使用手順の説明

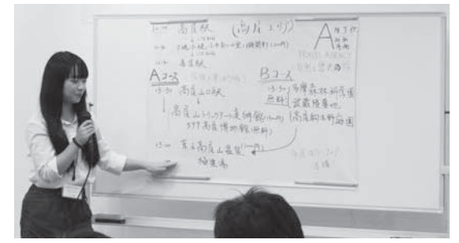
三鷹市

平成27年度はこれまでの交流活動を整理しつつ、連携する活動について話し合いの機会を持ち現状の確認に努めた。特に、まち歩きガイドマップの作成活動においては総合政策学部、外国語学部の学生と教員が幾度も三鷹市内の商店街を訪問し、インタビューと話し合いを重ねたうえで成果物となるガイドマップが制作された。

まち歩きマップの調査の様子

八王子市

平成27年度は継続して大学コンソーシアム八王子の事業に参画した。運営委員や部会員としての活動に加え、第10回学生天国、外国人留学生の座談会や八王子まつり山車曳き体験、第７回学生発表会等々へ参加した。第５回FD・SDフォーラムでは、「地域と大学」に焦点をあてた分科会を担当した。


大学コンソーシアム八王子留学生座談会の様子

目次

ごあいさつ 20

羽村市長　並木　心
八王子市長　石森　孝志
三鷹市長　清原　慶子

平成27年度実績報告書概要 21

平成27年度事業の実績報告と具体的な成果 …… 21
平成27年度　杏林CCRC拠点推進委員会　開催記録 …… 25

補助事業　成果報告 27

杏林CCRC研究所活動について

研究所の活動と地域への還元への新しい取組みについて …… 27
杏林CCRC研究所　所長　蒲生　忍

教　育

1　教　育 ① …… 28
「地域と大学」で地域の課題を学ぶ
羽村市、八王子市、三鷹市、修了生による講義

研　究

2　研　究 ① …… 29
杏林CCRC研究所セミナー報告

3　研　究 ② …… 32
地域志向教育研究費について

社会貢献活動

4　社会貢献活動　健康寿命延伸 ① …… 33
「生涯スポーツの機会提供」プログラム

5　社会貢献活動　健康寿命延伸 ② …… 34
障がい者スポーツの普及・参加支援

6　社会貢献活動　健康寿命延伸 ③ …… 34
「平岡町わくわく健幸教室」のフォローアップ

7　社会貢献活動　健康寿命延伸 ④ …… 35
市民と多職種で地域包括ケアを考える
参加型ワークショップ「たまケアLive」の企画と運営

8　社会貢献活動　生きがい創出 ① …… 36
子育て支援プログラム

9　社会貢献活動　生きがい創出 ② …… 37
住み慣れた地域で過ごすための
「在宅・あぶりこツーカーチーム（仮称）」作り

10　社会貢献活動　生きがい創出 ③ …… 38
杏林大学・三鷹ネットワーク大学共催
「私の案内書作り」講座

11　社会貢献活動　災害に備えるまちづくり ① …… 39
防災ふれあいフェア等防災プログラム

地域・大学間コーディネーターの活動

さらなる発信力のあるCOC事業・地域貢献活動への展開 …… 42
地域・大学間コーディネーター　井上　晶子

全　体

12　全　体 ① …… 43
第3回杏林CCRCラウンドテーブル・
第4回CCRCフォーラムを開催

13　全　体 ② …… 44
「杏林・羽村コモンズ2015　つながる地域と大学
～羽村が杏林大学のフィールド～」の開催

14　全　体 ③ …… 45
第5回大学コンソーシアム八王子FD・SDフォーラムと
COC関連FD・SD研修会を開催

15　全　体 ④ …… 46
杏林大学　地（知）の拠点整備事業
平成26年度事業に係る第三者評価報告書

出張報告

国　内 ① …… 48
「地(知)の拠点整備事業」の訪問調査

国　内 ② …… 49
「COC／COC＋全国シンポジウム」への参加

公開講演会・公開講座 …… 50
新聞記事紹介 …… 54

ごあいさつ

羽村市長
並木　心

地域における「地（知）の拠点」として更なる発展を期待

杏林大学と羽村市との連携事業につきましては、跡見学長をはじめとする大学関係者の皆様にご尽力を賜わり、心より感謝申し上げます。

平成25年度に５か年事業としてスタートした地（知）の拠点整備事業では、平成27年度が計画期間の中間点として、市民・事業者の皆様を交え、杏林・羽村コモンズや、杏林CCRCフォーラムなどを開催する中で、杏林大学との連携の深化に取り組ませていただきました。

羽村市といたしましては、平成28･29年度につきましても、杏林大学と羽村市･八王子市･三鷹市でこれまで積み重ねてきたノウハウを生かし、地（知）の拠点整備事業に掲げる３本の柱に沿った事業の更なる充実を図ることで、より強固な協力体制を築き上げることができますよう、全力を挙げて取り組んでいく所存です。

地（知）の拠点整備事業の推進により、貴学が地域における「地（知）の拠点」として、更にご発展されますことをご祈念申し上げます。

八王子市長
石森　孝志

八王子の地域で問題解決力を持つ学生の育成を

「新しい都市型高齢社会における地域と大学との統合知の拠点」を目指して、杏林大学が八王子市及び三鷹市、羽村市との連携を強化し、全学的に地域に目を向けた教育･研究･社会貢献を進められていることに、深く敬意を表します。

「地（知）の拠点整備事業」３年目となる平成27年度は、八王子キャンパスでの「防災ふれあいフェア」の開催や地域の防災を学ぶ「地域と大学」の開講に取り組まれたほか、全国から大学教職員が参加する大学コンソーシアム八王子主催の「FD・SDフォーラム」において、地域貢献活動の分科会を担当するなど、地域の発展に大いに貢献されていることに感謝いたしております。

今後も、大学として地域貢献に取り組まれるとともに、学生の教育的社会的経験の場として、八王子の地域において問題解決力を持つ学生を育成されることを期待しております。

三鷹市長
清原　慶子

井の頭キャンパス移転を契機とした、地域における、さらなる地（知）の拠点の推進を

平成27年度は引き続き、地域志向型授業に三鷹市の職員が講師として参加するとともに、杏林大学の教員及び学生の皆様が、国際交流フェスティバルなどの三鷹市の事業に、企画段階から参加していただき、協働の分野が広がる年度となりました。

平成28年４月に開設された「井の頭キャンパス」では、５月21日には「杏林大学地域連携事業ワークショップ　まちづくりに『新しい風』を」が開催され、多くの学生の皆様と市民の皆様とがこれまでの交流を基礎に、今後の協働の方向性を討議されました。今後も総合大学としての地（知）を活かした取り組みが、大学の発展はもちろんのこと、地域活動の充実につながっていくことを期待しています。

平成27年度実績報告書概要

事　業　の　実　績	事業に係る具体的な成果
(1) 4月　3自治体との協力に基づく「地域と大学」科目の継続開講 ※詳細はP28参照	
(2) 4月　PBL型科目として位置づけている「プロジェクト演習科目」の開講（外国語学部「プロジェクト演習」新設）	
平成27年度より、新たなPBL型科目として外国語学部２年次において「プロジェクト演習Ⅰ・Ⅱ」を開講した。学生をグループ分けした上で、地域課題を特定するための文献資料調査、課題の詳細を把握するためのフィールドワーク、「地域と大学」を踏まえたグループディスカッション、解決策の提示までの一連の流れを、連携３自治体の協力の下で１年間をかけて実施した。観光交流文化学科の取り組み成果について、連携３自治体関係者を招いて発表する機会を平成28年１月９日に設けた。	このPBL型地域志向科目を通じて、どのような環境でも「答えのない問題」に最善解を導くことができる能力である「問題解決力」の向上することを企図しており、それを構成する問題発見力・問題解決発想力・ファシリテーション力を、「地域と大学」と合わせて涵養することができた。 また、フィールドワークの実施によって地域課題の「現場」を知ること、合わせて発表会の実施を通じて成果を地域に還元し地域関係者と議論することを通じて、教室内での学びの実質化がはかられた。
(3) 4月　4学部科目の「地域志向」強化（地域関係者の講師招聘など）	
総合政策学部「学際演習」や、外国語学部「ゼミナール」などの地域志向化を引き続き行うとともに、既存科目の内容を再検討し、地域志向科目を平成26年度の75科目から91科目に増加させ、延べ1,162名が履修した。また、３自治体との協力に基づく「地域と大学」の授業では延べ20名の連携市職員を講師や評価者として招聘した。	事業採択後の３か年の取り組みを通じて、「地域と大学」に始まる一連の教育の地域志向化以前に入学した学生についても、地域課題をテーマとした「問題解決力」の涵養に繋がる科目を履修することが可能となった。合わせて、教育的効果を企図した研究・社会貢献活動に学生たちが積極的に参加する場を増やすことで、現場での体験を通じた学びの実質化を進めた。
(4) 4月～ 3月　地域志向教育研究経費の交付、活動 ※詳細はP32参照	
(5) 4月～ 3月　平成26年度の検討に基づく研究活動の実施	
杏林CCRC研究所では「CCRC」に関する研究活動、各種の高齢社会に関する研究会への参加、また日経地方創生フォーラム等での講演を行った。研究の成果は平成27年度杏林CCRC研究所紀要に論文として掲載し、その他の活動に関する記録は紀要に「報告」として掲載した。 研究所が主導した地域志向教育研究では本学付属病院を中心とする医療情報ネットワークの可能性を探る多摩地区の医師会、三鷹市の病院施設に対するアンケート調査を行った。その結果は平成28年２月27日に報告会「ICTを用いた地域医療ネットワークの近未来」を開催し、調査対象者等に報告し、紀要にも報告論文として掲載した。	本事業は都市型高齢社会の諸問題、特に「健康寿命延伸」と「生きがい創出」により医療・介護需要の増加に対応すること、また「災害に備えるまちづくり」で高齢者等の弱者の安全に配慮することを含意しており、「生涯活躍のまち（日本版CCRC）」構想を先取りし、かつ持続可能な都市型の生涯活躍のまちを模索する試みである。この事業構想に基づく地域志向研究や研究所の実施する研究活動により、本学の教職員の地域問題への意識が向上し積極的な地域課題へのかかわりが促進されている。またその成果が各学部における「地域と大学」の教育に取り入れられている。
(6) 4月～ 3月　研究会開催（以降月例で開催）による地域志向研究 ※詳細はP８ ～ 49参照	
(7) 9月　松江市等の国内先進地域での現地調査 ※詳細はP48 ～ 49参照	

事　業　の　実　績	事業に係る具体的な成果
⑻ 2月～ 3月　平成28年度の研究活動内容を杏林CCRCラウンドテーブル・杏林コモンズでの議論を基に立案	
平成27年度においては三鷹市では講演会開催時期と開催場所の集中化、八王子市と羽村市への講演会提供に努めた。平成28年度は三鷹市井の頭の新キャンパス開設による教育機能の三鷹市への統合を考慮し、三鷹市での公開講演会の開催時期と場所について、杏林CCRC研究所、広報・企画調査室、地域交流課により検討した。八王子市および羽村市に対しても継続的に講演会等を提供する方針を確認した。 また平成27年度に、より意見交換を活発化し地域の要望を明確化する試みとして「金曜サロン」を開催した。平成28年度は一部は継続し、一部は三鷹市生涯学習施設での講座として発展させることとした。	本事業で連携する三市は既に高齢者が人口の21%を超える超高齢社会であり、今後の医療と介護需要への対応は喫緊の課題である。全学共通科目「地域と大学」においてこの地域課題について積極的に取り上げる。この科目は平成28年度井の頭新キャンパス開設に伴う教育機能の統合により可能となったもので、従来の設定を一新して開講するものである。 平成27年度は三鷹市のコモンズとして設けた研究所分室を利用した金曜サロンを開催した。平成28年度はこれを基に地域住民と大学とが協働できる生涯学習組織の講座へ移行し発展させていく予定である。講座に移すに際して、多世代対話を実現するため学生の参加を念頭に企画することとした。
⑼ 3月　杏林CCRC研究所紀要発刊	
平成27年の研究所の研究成果を広く公開する4編の論文（うち一編は地域志向教育研究報告論文）、研究所のその他の活動に関する14件の報告、8件の地域志向教育研究報告からなる「平成27年度杏林大学杏林CCRC研究所紀要」を平成28年3月に発行し、連携三自治体とその関係機関、教育機関、医療機関を中心に配布した。	紀要に所収した論文「都市型超高齢社会の健康と安心を目指した杏林大学の取組」においては、これからの超高齢社会において医療人材の育成の重要性を指摘している。本学で現在就学中の医学部と保健学部の学生は今後の超高齢社会の医療と介護を担う中心的な人材である。その教育においては広い視野と熟達した専門性を持たせ、また高い付加価値を持つ人材とすることが重要であるとし、今後の本学での教育の方向性を提案示唆する論文である。 論文「米国CCRCと「日本版CCRC」構想」では「生涯活躍のまち」における医療介護需要について分析し、同じくそれを担当する人材教育について言及している。
⑽ 4月～ 3月　「生きがい創出」「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」に係る各既往プロジェクトの実施 **※詳細はP33 ～ 41参照**	
⑾ 4月～ 3月　杏林CCRCラウンドテーブル・杏林コモンズの成果を参考に上記テーマに基づいた新規プロジェクトの企画・実施	
平成27年度の新規プロジェクトとして企画・実施したものとして、三鷹まち歩きマップ、本学の取り組みの全体像を外部公開したイベント「杏林・羽村コモンズ」、障がい者スポーツ「ボッチャ」の三鷹での普及活動等が挙げられる。合わせて、防災ふれあいフェアにおいて災害弱者の視点を取り入れる等、既存の事業の充実が図られた。 また、本学と各自治体・団体との取り組みを、他の自治体・団体が情報を得る機会となり、その連携が強化された。	杏林CCRCラウンドテーブル・杏林コモンズにおける地域の意見の吸い上げを通じて、公開講演会・セミナーの内容の強化や、各種取り組みの改善・拡大が進んだ。 また、羽村市で行っていた商店街活性化の取り組みが、三鷹市に派生して「三鷹まち歩きマップ」の作成につながる等、杏林CCRCラウンドテーブル・杏林コモンズの場においての自治体・団体間での取り組み情報の共有が、新たな取り組みを生み出す契機となった。
⑿ 4月～ 3月　公開講演会の内容を本事業の趣旨に基づいた形で拡充し、連携自治体において実施	
本学広報・企画調査室、杏林CCRC研究所、地域交流課との共同で、連携自治体である三鷹市で13回、羽村市で3回、八王子市で3回、合計19回、本補助事業のテーマである「生きがい創出」「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」に関する公開講演会を行った。公開講演会には延べ1,245名の参加があった。27年度は新しい試みとして障がい者・高齢者スポーツをテーマとして連続講座を企画し、9月から10月にかけて開催した。来場者数は27名であった。	平成28年度の講演会会場はアクセスが容易であり、また三鷹市井の頭キャンパス移転を踏まえて三鷹ネットワーク大学を中心に開講した。その内容は杏林大学の知的資源を積極的に活用、また昨年度受講者のアンケート調査に基づいたニーズに沿ったものとした。そのため日常生活の健康やグローバリゼーション、ライフスタイルなど、市民へ有益な情報提供を行うことができた。

事　業　の　実　績	事業に係る具体的な成果
⒀ 4月～ 3月　生きがいづくりコーディネーター認定に係るウェルネス科目群の本格実施	
保健学部・総合政策学部・外国語学部で八王子キャンパスにて開講している科目のうち、本補助事業のテーマである「生きがい創出」「災害に備えるまちづくり」を軸に、それに関連した講義・演習科目を組み合わせて、「生きがいづくりコーディネーター」養成プログラムを開講した。このプログラムは市民・学生を対象とした教育プログラムであり、昨年に引き続き、本補助事業連携自治体の在住・在勤者に対しては履修料を無料とし、市民の積極的な受講を促した。その結果、三鷹市在住の1名の受講者を得て、平成28年3月19日に修了書を授与した。	修了者には今後本学の教育（授業での講演など）・社会貢献活動（健康寿命延伸の取組）に関わっていただくことを予定している。地域と大学とのより密接な連携関係の構築に加え、学生の学びの充実を図る準備が整った。そのために連携自治体との継続的な協議を行っている。
⒁ 12月～ 3月　平成28年度ウェルネス科目実施に向けた検討、杏林CCRCラウンドテーブル等におけるテーマ調査	
平成27年度は、「生きがい創出」「災害に備えるまちづくり」の2カテゴリーで「生きがいづくりコーディネーター」養成プログラムの募集を行い、「災害に備えるまちづくり」の講座を開講した。平成28年2月には第3回杏林CCRCラウンドテーブルにおいて、地域関係者にとって有益な科目の検討や調査を実施した。	このプログラムは、運用およびテーマについて本学のみならず連携自治体との継続的な検討を行ってきた成果である。平成27年度杏林CCRCラウンドテーブル（平成28年2月13日開催）の場において、各市から既存プログラムの有効性と、市民のニーズに沿ったプログラム構築への要望に対する発言があった。そのため更なる地域の課題に寄り添ったプログラムの構築が期待される。
⒂ 4月～ 3月　平成28年度の三鷹市への教育・研究機能集約に伴う体制づくり	
平成27年11月24日・平成28年2月24日の2回、三鷹市と本学との連携に関する包括的な全体連絡会を実施し、そのなかで本補助事業に関する各種の取組について事業計画として立案進捗状況について確認を行った。これ以外にも継続的に三鷹市役所・市内関連団体と本学の移転後の教育・研究機能の集約について、地域・大学間コーディネーター・地域交流課とを中心に協議を行ってきた。 平成27年3月に行った学内取組提案のアンケートの集計を前提にして、三鷹市役所の関係部課所・諸団体との打ち合わせ機会がさらに増加し、三鷹市における教育・研究・社会貢献活動について、新規事業の立案に加え、既存の各地域での取り組みを三鷹市で展開していく可能性の検討が進んだ。	これらの活動を通じて、キャンパスの移転によって教育・研究の地域志向化に切れ目が生じないようにするための準備体制を構築した。 また、平成28年度の三鷹市井の頭キャンパスへの移転をふまえ、八王子キャンパス3学部（保健学部・総合政策学部・外国語学部）の三鷹市における教育活動が「プロジェクト演習」「学際演習」「ゼミナール」などの科目において増加したが、三鷹市役所など関連団体の協力を得て十分な成果が得られた。 また、新たな取り組みの形として、本事業の主旨も取り入れつつ、三鷹駅前商店街活性化のための「まち歩きマップ」を作成した。その取り組みは、三鷹市役所・商工会など市内関係団体・本学（学生・教職員）の相互協力で行われ、移転後の地域活動の枠組みを確立することができた。
⒃ 4月～ 3月　杏林CCRC拠点推進委員会の隔月開催、内部評価の実施、3市と具体的連携協議	
杏林CCRC拠点推進委員会は、平成27年4月20日に第1回を開催し、以降、平成27年度中に7回の会議を行った。人事・活動計画などについての審議を行い、進捗状態の管理を行った。 連携自治体3市とは、以下の通りに行った。 ①八王子市：大学コンソーシアム八王子の各部会、あるいはプロジェクトごとの会議を通じて複数回の議論を行った。 ②三　鷹　市：担当者間の打ち合わせに加え、平成27年4月21日・8月13日・11月24日・平成28年2月24日に連携事業の全体像を確認する会議を持った。 ③羽　村　市：担当者間の打ち合わせに加え、平成27年4月22日・10月27日に連携協議会を実施し、連携の全体像の確認を行った。	杏林CCRC拠点推進委員会は平成27年度中に7回開催し、本事業のコンセプトである杏林CCRC構想を円滑に推進するためのPDCAサイクルのみならず、従来の地域交流活動を総括連携するシステム、CCRCに関するさまざまな知見が報告される場として機能した。合わせて、井の頭キャンパス設置に伴う学部の壁を越えた取組の可能性について活発に議論を行うことができた。 連携自治体3市とは日常的に密接な連絡関係を取っており、それらの中から、自治体関係者への新たな障がい者スポーツの普及活動や、高齢者が自らの生活習慣などを記録する「私の案内書」づくりなど、新たな地域志向活動が創出されている。

事　業　の　実　績	事業に係る具体的な成果
⑰ 4月～ 3月　本事業内容の学内外での周知徹底（FD・SD講演会の実施時期検討）、ウェブサイトでの情報公開（随時発信）	
本事業の学内外での周知徹底を行うため、以下の活動を行った。 ①事業成果報告書・地域交流活動報告書・杏林CCRC研究所紀要の発行・配付に加え、日経地域創生フォーラム等の講演会や、杏林・羽村コモンズなどさまざまな機会において本学の取り組みを紹介し、学内外への周知を行った。 ②全学FD・SDワークショップの実施 ③ウェブサイトでは、「最新ニュース」欄では地域貢献活動やシンポジウム等への参加報告等を掲載し、事業の進捗状態を報告した。「イベント」欄では「フォーラム」や「研究所セミナー」「講演会」等に関する予告と報告他を掲載したことにより、市民や本学の取組に興味を持つ方々からの問合せを受けた。特設サイトへのアクセス数は開設以来平成28年３月末までは約27,387件、一日平均アクセス数は約80件弱であった。 ④地域活動ハンドブックの追加作成	実績①～④についての成果を以下にまとめる。 ①本補助事業の成果をさまざまな角度から紹介することが可能となり、学内外において本学の取組の趣旨・成果についての周知徹底を図ることができた。 ②・③ 全学FD・SDワークショップでは、終了後に行ったアンケート調査では、職位に関係なくグループディスカッションする場を設けたことに対する高い評価が寄せられており、授業の引き出しが増えたといった教育改善に関するコメントも自由記述欄に見られた。その上で、このような科目の地域志向化における教育手法のアップデートが可能となる情報の提供を継続的に行う必要を確認した。 ④平成27年度の「地域と大学」「プロジェクト演習系科目」においてこのハンドブックを利用することの有効性が担当者間で確認されていることから、今年度も利用することで、地域志向化教育を推進するための有力なオリジナルツールとしての確立がなされると考えている。
⑱ 4月　本事業に関する各種アンケートの実施	
文部科学省からの指示設問に独自設問を加えた平成26年度本補助事業の取組に関するアンケートを作成し、平成27年３月～５月にかけて本学の全学生・全教職員（看護職、技術職を除く）・連携自治体の責任者に対して実施した。学生の回収率は65.8%、教職員の回収率は54%、自治体の回収率は100%であった。	過去２年間の取り組みを通じて、教職員の本事業に対する認知度はほぼ100%となっており、新たな活動への参加意志も高い一方で、自由記述回答の中からは「時間的余裕」に対する指摘が多く、今後のFD活動の参考となった。また、学生においては教員からの情報提供が地域への関心の高まりや活動への参加意思に大きく影響していることがあきらかになり、地域志向科目と学外での活動とを連動させていく必要性が明らかになった。連携３自治体の満足度は高い状況にある。
⑲ 4月～ 3月　杏林コモンズの運用	
三鷹市では杏林CCRC研究所を三鷹コモンズとして運用した。研究所セミナーを地域住民等へ開放することに加え、今年度より新たな試みとして「金曜サロン」を定期的（「死生学」８回・「シニアライフ」７回）に開催した。ここでは高齢者を含む地域住民と若手教員との活発な世代間対話が行われ多くの意見や感想が提示された。 八王子市では八王子市学園都市センター内において、本学の活動を紹介するとともに公開講演会を通じて市民の声を聞く機会とした。 羽村市では、公開講演会の場を通じた活動とともに、生涯学習センターゆとろぎ内に設置した「杏林ポスト」を用い市民からの意見、要望を吸い上げる手段として活用するとともに本学の活動の紹介を継続した。また、平成27年９月12日～13日には、「杏林・羽村コモンズ」と称し、生涯学習センターゆとろぎにおいて、学生の活動発表、トークセッション、TakeoutCampus（公開講座）を開催した。参加者は延べ324名であった。	コモンズにおいて本学の活動を紹介するとともに、公開講演会・杏林CCRC研究所セミナー等の本学の知を公開する場に３市連携自治体関係者・地域住民の参加を促し、積極的な意見交換を行うことで、本補助事業を進めていく上での有益な意見が得られた。合わせて、その概要記録についてはウェブサイト等にて公開し、大学知の公表を行った。 三鷹コモンズで取り上げた「死生学」はそこでの意見交換に基づき改変して平成28年度は三鷹市の生涯学習施設で対話型の講義として開講することを計画している。 また「シニアライフ」は研究所特任助教・松井が総合政策学部での講義に取り入れる予定である。 また、羽村市に設置した「杏林ポスト」への投函を通じて４件の要望が市民から寄せられ新規事業の検討材料となった。 今年度より新たな取り組みとして、羽村市で本学の取り組みを地域住民に対して紹介する場として杏林・羽村コモンズを立ち上げたことで、羽村市における本学の取り組みに対する周知が進んだことに加え、今後の取り組みに向けた有益な意見を得られることができた。 杏林・羽村コモンズについては、参加者に対してアンケート調査を行い、講演会などの活動を通じた生涯学習機会の充実や学生の地域活動の活発化について積極的な評価がなされた。この結果を受け、平成28年度も同種の取り組みを実施する（三鷹市）こととした。

事　業　の　実　績	事業に係る具体的な成果
⑳ 4月～ 6月　事業年次報告書の作成	
本事業の平成26年度の取組成果を取りまとめた成果報告と本学の教育・社会貢献活動を広く社会に公開することを目的とした地域交流活動報告をあわせた報告書を平成27年７月に発行した。本補助事業採択校・連携自治体関連施設を中心に配付するとともに、学内関係者・連携自治体・周辺の大学等教育機関など約800部を配布した。	本補助事業の成果をさまざまな角度から紹介することが可能となり、その配付を通じて、学内外において本学の取組の趣旨・成果についての周知徹底を図ることができたともに、連携自治体間の情報共有にも寄与した。
㉑ 9月　外部有識者からなる第三者評価機関の点検・改善を実施	
平成27年９月１日に第三者評価委員会を開催し、平成26年度の事業成果について点検・評価を受審した。評価内容については報告書にまとめ、平成27年10月27日に発行、平成27年10月30日にウェブサイトに公表した。	杏林CCRC拠点推進委員会の定期的な開催を通じて、事業の全学的な理解が進み、PDCAサイクルの確認を通じて進捗状況に大きな遅れが生じることのない円滑な事業推進へとつながった。また、第三者評価委員会では、本学の迅速な取組に対する評価をいただくとともに、井の頭キャンパス移転が及ぼす影響への対処、事業の継続体制、取り組みに対する学生・地域への効果測定、生きがいづくりコーディネーターの活性化など、さまざまな提言をいただき、今後の活動の方針策定の大きな参考となった。
㉒ 2月　第３回杏林 CCRCラウンドテーブル（羽村市）開催 **㉓ 2月　第４回杏林 CCRC フォーラム（羽村市）の開催** **※詳細はP43参照**	

平成27年度　杏林CCRC拠点推進委員会　開催記録

回	日 程	場 所	議　題	
第１回	4月20日	本部棟6階	• 平成27年度工程表について • 平成27年度予算について • 平成26年度実績報告書について • 杏林CCRC研究所紀要の発行・Web公開について • 地（知）の拠点整備事業アンケート、フォローアップについて • 平成27年度公開講演会について • 三鷹市で行う教育・研究・社会貢献活動について（現状と予定）	• COC+の公募について • 生きがいづくりコーディネーターについて • 地域志向教育研究費選考について（８件） • 地域活動助成費選考について • 地域志向教育研究費、地域活動助成費に関わる学生達のアルバイト料支給の考え方について
第２回	5月18日		• 公開講演会について（１件） • 平成25年度補助金額決定について • 杏林CCRC研究所副所長について • 平成27年度生きがいづくりコーディネーター（在校生）の履修について • 地域活動助成費について	• 補助事業中間評価について • 文科省フォローアップの提出について • 杏林・羽村コモンズの開催について • 地域志向教育研究に伴う海外出張について • 宮崎大学　地域資源創生学部の設置について
第３回	7月13日		• 公開講演会について（５件） • 第三者評価委員会について • 杏林羽村コモンズについて • 防災ふれあいフェアについて • 地域活動助成費について • COC＋事業の協力について	• 予算状況について • ９月連続講座の協力要請について • 成果報告書について • 地域志向教育研究費について • 地域活動助成費について

回	日程	場所	議題	
第４回	９月14日	本部棟 ６階	• 公開講演会について（２件） • COC事業工程表について • 地域活動助成費について • 第三者評価委員会について • 杏林・羽村コモンズの実施について • COC全学アンケート結果について •「ボッチャ」普及活動支援について •「杏林医学」公開講演会―広報室・医学会との連携について	• 研究所セミナーの開催について • 研究所コモンズ活動：金曜サロン「死生学」「シニアライフを考える」について • ２月連続講座「高齢社会問題を考える」について • 研究所紀要の編集と発行について • 防災ふれあいフェアの開催について • 予算執行状況について • 杏林CCRC研究所分室（三鷹産業プラザ309号室）の賃貸契約の解除について
第５回	11月16日		• COC公開講演会について（６件） • COC事業工程表について • 第三者評価委員会について • COC全学アンケート再回収について •「ボッチャ」普及活動について • 防災ふれあいフェアの開催について • 予算執行状況について	• 杏林・羽村コモンズのアンケート集計結果について • 岩手大学COC＋採択に伴う連携確認について • 国内出張について • 生きがいづくりコーディネーター実施要領について • 英文校正代金について • 補助金連絡会について
第６回	１月18日		• COC公開講演会について（４件） • COC事業工程表について • COC全学アンケート再回収について • 平成28年度　４学部合同　地域と大学について • 国内出張について • 杏林CCRCフォーラム・ラウンドテーブルについて • ICT医療講演会について • 九州歯科大学、西南女学院大学からのCCRC研究所の見学依頼について • 予算執行状況について	• 平成27年度補助金使用使途について • 人事関係について • FDSD研修会について • 地域志向教育研究費の募集について • 履修証明プログラム「生きがいづくりコーディネーター」受講科目について •「生きがいづくりコーディネーター養成講座」の市推薦枠について • 高知出張について
第７回	２月15日	本部棟 11階	• COC公開講演会について（１件） • 平成27年度COC事業工程表について • 杏林CCRCフォーラム・ラウンドテーブルについて • 予算執行状況について • H26「地（知）の拠点整備事業（COC）」実績報告書の確認事項について • 来年度人事関係について	• 杏林CCRC研究所（三鷹産業プラザ309号室）の賃貸契約の解除について • 生きがいづくりコーディネーター養成講座修了認定について • 全学アンケートについて • 平成28年度COC事業工程表について • 三鷹市地域活性ガイドブックの作成について
第８回	３月14日	本部棟 ６階	• 日経　地方創生フォーラムへの参加について • ICT医療連携講演会について • COC ／ COC＋全国シンポジウム（高知大学主催）への参加について • 杏林CCRC研究所紀要の発行について • FDSD研修会について •「生きがいづくりコーディネーター養成講座」修了式について • 予算執行状況について • 平成28年度計画調書について	• 学生活動発表会（杏林・三鷹コモンズ）について • 平成27年度実績報告書の提出について • 平成27年度予算の使用使途について • 地域志向教育研究費選考について • 地域活動助成費の募集について •「生きがいづくりコーディネーター養成講座（在学生）」プランについて •「生きがいづくりコーディネーター養成講座」受講生一覧について • 次年度杏林CCRC拠点推進委員会日程について

研究所の活動と地域への還元への新しい取組みについて

杏林CCRC研究所　所長　蒲生　忍

杏林CCRC研究所では、大学が持つ知的資源をより広く地域住民に還元するため、「生きがい創出」「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」に関連する合計16回の公開講演会を実施しました。ほとんどの講演会は土曜日の午後、または平日の夜に開催されましたが、多数の市民の皆様に参加していただきました。限られた時間の中ではありましたが、多くのご質問を頂戴しました。ご理解の一助となれば幸いです。平成28年度もより多くの皆様の疑問にお答えできるような講演会を開催していきたいと考えます。講演を引き受けていただいた教員の皆様のご協力、講演会の運営には広報企画調査室や杏林医学会他の協力を得ました。

杏林CCRC研究所では、「持続可能な都市型高齢社会の未来像」を研究テーマに掲げ、独自の研究活動を展開してきました。昨年度は研究所の蒲生と松井がそれぞれ米国CCRCの視察を踏まえ「少子高齢社会における医療倫理」、特任助教の松井は「米国における継続的ケア付高齢者コミュニティCCRCの現状と課題」をテーマとする論文を杏林CCRC研究所紀要に発表しました。今年度は「生涯活躍のまち：日本版CCRC構想」が発表されたのを受け、杏林大学が医療にかかわる多くの人材の育成に努めている現状を踏まえて蒲生が独自の見解を「都市型超高齢社会の健康と安心を目指した杏林大学の取組：医療人材の育成の重要性」を、松井は昨年度の考察をさらに発展させ「米国CCRCと日本版CCRC構想」を上梓しました。

これに加え、９件の地域志向教育研究費を採択し、研究助成費を配賦することで、その研究活動の支援を行いました。研究所が実施した地域志向教育研究「杏林大学と地域の医療情報ネットワーク構築に向けた検討」では、総務省情報流通行政局の吉田宏平情報流通高度化推進室長においでいただき地域医療関係者に向けた講演会の開催等に加え、研究所の相見を中心として「ICT医療情報連携に関する調査」を実施し、その他の地域志向教育研究の成果と共に、その調査報告を紀要に掲載しました。

研究所では連携市の市民の皆様と積極的に対話を行い市民のニーズを把握することを目的に、非公式な対話の場「金曜サロン」を開催しました。サロンのテーマは「死生学」と「シニア・ライフ」とし研究所から毎回テーマと基本情報を呈示し自由な意見交換を行なう形式としました。死生学は年間８回、シニア・ライフは７回を開催し毎回予定時間を大幅に超えて意見を交わす場となりました。この成果を来年度の講座提供等に生かしたいと考えています。また健康寿命の延伸に向けた取組みとして地域志向教育研究や地域活動で取上げている障がい者スポーツ「ボッチャ」の普及に向けた連続講座を開催しました。

これらの研究所の研究活動、セミナー、地域志向教育研究及び講演会活動の詳細については研究所紀要に掲載し発行配布するのみならず、ホームページ上にも公開しています。

来年度はCOC事業も４年目を迎えます。また井の頭キャンパスへの移転も実現します。今までの取組みの結実を目指して焦点を絞って研究活動を進めたいと考えています。

1　教　育①

「地域と大学」で地域の課題を学ぶ 羽村市、八王子市、三鷹市、修了生による講義

●羽村市

平成27年４月22日・６月17日、総合政策学部・外国語学部の授業では、羽村市企画総務部企画政策課、産業環境部産業課にそれぞれ講義をしていただいた。羽村市の概要と課題についての講義に続き、「羽村市の認知度向上と若者が積極的に参加する街づくり」「地域にとって必要な生き生きとした商店街とは」という学生たちが提案するテーマが発表された。

市の担当者・教員からの情報提供に続き、学生は５人程度のグループに分かれ、羽村市の地域資源の活用や人を呼び込むための新規事業のアイディアを出し合い、模造紙を使ってアイディアを整理し、５月20日・７月１日の授業において羽村市の担当者の前でその企画を提案した。羽村市の担当者からは、ターゲットやキャッチコピーがよく考えられているもの、提案の内容が良くて企画として採用できそうなものなどが高く評価された。

４月17日の保健学部の授業にも、福祉健康部健康課の職員を招き講義頂いた。

●八王子市

平成27年６月３日の総合政策学部・外国語学部の授業では、八王子市生活安全部防災課に講義していただいた。まず、東日本大震災の教訓と首都直下型地震に対する備えについてお話しいただき、その後、実際に災害が起きた時に「避難所を、男女共同参画の視点から、どのように運営するか」という課題を出していただいた。

学生たちは、その課題を解決するために、実際にはいないけれどもあたかもそこにいるかのようなペルソナという架空の人物を想定して、その人たちが実際に震災時に避難所でどのような課題に直面し、その課題を解決するためにどのような役割を担うことができるかを検討し、発表した。さらに６月10日の授業では、ペルソナが「持病を持っている」「ストレスを感じやすい」「日本語を話すことができない」ことなどを想定したうえで、そうしたペルソナが避難所でいかなる役割を担うことができるかを検討し発表した。

八王子市の担当者からは、役割分担がしっかりとできているもの、年齢層を越えてお互いの強みと弱みを理解しながら連携しているもの、関係性まできちんと書かれているものなどが高く評価された。

４月17日の保健学部の授業にも医療保険部地域医療政策課の職員を招き講義頂いた。

●三鷹市

平成27年７月８日の総合政策学部・外国語学部の授業では、三鷹市健康福祉部に講義していただいた。まず、三鷹市の概要、高齢者の健康福祉問題への対処策の概要について説明いただき、その上で「高齢者が住み慣れた地域、あるいは自宅でできる限り暮らし続けられるようにするために、地域（住民、大学･学生）が出来ることは何か？　また、何をすべきか？」という課題を出していただいた。

学生たちは、若者らしい想像力を働かせ、自分たちにできることを真剣に考えていた。中には実際に市に提案できそうな高齢者へのかかわり方のアイディアも出された。高齢者をともに支え合えるような関係づくりが提案されるなど、今後ますます深刻化する超高齢社会を世代間で助け合って生き抜こうというポジティブな姿勢もみられた。

４月17日の保健学部の授業にも、健康福祉部高齢者支援課の職員を招き講義頂いた。

医学部では、地元三鷹の医療や福祉について健康福祉部職員の講義を受けたり、街中に出て体験したり、話を伺うなどのフィールドワークを通じて、医師・医療者に望まれていることを学ぶ機会となった。11月21日にはその学習発表会が行われた。

●コーディネーター養成講座修了生による講義

平成27年５月20日､保健学部の授業では平成26年度の「生きがいづくりコーディネーター養成講座」の修了生３名を招き、講義をしていただいた。

授業の冒頭で、保健学部の久米助教による救急救命学科の地域活動、特に前年度に開催した「防災ふれあいフェア」や「羽村市立中学校BLS指導」､「全関東八王子夢街道駅伝大会での救護活動」の取り組み、学生と地域活動の意義についての講義があった。

その後、地域活動の先輩である､「生きがいづくりコーディネーター養成講座」の修了生から、それぞれの地域活動について講義していただいた。学生にとっては、語学、医療、介護、労務など、それぞれの経験を活かした多方面からのアプローチ方法を学ぶ貴重な機会となった。

羽村における杏林生の取り組み紹介

2　研　究①

杏林CCRC研究所セミナー報告

■第14回　杏林CCRC研究所セミナー

日　　時	平成27年４月３日(金)	場　　所	杏林CCRC研究所分室
講　　師	蒲生忍（杏林CCRC研究所所長）、松井孝太（特任助教）		
講演テーマ	「米国高齢者研究と米国高齢者施設事情」		
概　　要	蒲生と松井が、平成26年10月と平成27年２月にそれぞれ実施した米国出張についての報告を行った。松井はセントルイスのワシントン大学で開催された人口高齢化や公衆衛生などがテーマのシンポジウムについて、蒲生はサンフランシスコ市にある日系人の高齢者施設に関して行った調査について報告した。		
参加人数	８名		

■第15回　杏林CCRC研究所セミナー

日　　時	平成27年５月１日(金)	場　　所	杏林CCRC研究所分室
講　　師	蒲生忍（杏林CCRC研究所所長）		
講演テーマ	「平成27年度杏林CCRC研究所の研究および活動方針について」		
概　　要	地域貢献活動については、広報・企画調査室と杏林医学会等との連携による講演活動を行うこと、連続講座を開催すること、「死生学」と「シニアライフを考える」という金曜サロンを主催することなどが確認された。研究活動については各研究所員の研究テーマと研究費受入・申請状態が、研究所セミナーについては毎月第１金曜日に開催することがそれぞれ確認された。		
参加人数	３名		

■第16回　杏林CCRC研究所セミナー

日　　時	平成27年６月５日(金)	場　　所	杏林CCRC研究所分室
講　　師	芝原美由紀（杏林大学保健学部教授）		
講演テーマ	「生涯スポーツ（含む障がい者スポーツ・高齢者スポーツ）の現状と展望」		
概　　要	国はスポーツ基本計画を策定し、障がい者スポーツの推進を図っているが、障がい者や高齢者のスポーツ活動には地域社会の取り組みが必要である。本学保健学部は、地域に対して体力づくりや健康増進などの知識と技術の提供ができるが、それを持続可能なものにするためには地域社会の協力が不可欠だとしている。また、障がい者スポーツ「ボッチャ」については、地域活動拡大への課題などをあげ、今後の活動について報告があった。		
参加人数	４名		

■第17回　杏林CCRC研究所セミナー

日　　時	平成27年７月３日(金)	場　　所	杏林CCRC研究所分室
講　　師	長谷川利夫（保健学部教授・杏林CCRC研究所副所長）		
講演テーマ	「精神科医療における隔離・身体拘束と権利擁護」		
概　　要	日本の精神科医療においては身体拘束が広く行われているが、長谷川氏が実施した15施設、1407名の精神科医療の従事者に対する隔離・身体拘束についての意識調査によると、８割以上の従事者が自殺予防や暴力の軽減に意義があるとしている。その一方で、半数近くの患者は放置されたと感じている。2003年以降、身体拘束を受けている患者数は増え続けているが、今後は、従事者に対して患者の不利益を考える研修が必要だと指摘する。		
参加人数	４名		

■第18回　杏林CCRC研究所セミナー

日　　時	平成27年９月４日(金)	場　　所	杏林CCRC研究所分室
講　　師	蒲生忍（杏林CCRC研究所所長）		
講演テーマ	「今年度後期の予定について」		
概　　要	研究所が関与する平成27年度後期の活動計画について研究所員が討議し、９月のCOC調整会議及び拠点推進委員会での審議に向けた資料の準備を行った。このセミナーでは、「ボッチャ」普及活動支援、「杏林医学」公開講演会―広報室・医学会との連携、研究所セミナーの開催、研究所コモンズ活動、２月連続講座「高齢社会問題を考える」、「研究所紀要の編集と発行」、海外出張などの活動計画と研究所員の役割分担が決定した。		
参加人数	４名		

■第19回　杏林CCRC研究所セミナー

日　　時	平成27年10月２日(金)	場　　所	杏林CCRC研究所分室
講　　師	蒲生忍（杏林CCRC研究所所長）		
講演テーマ	「ICTを利活用した医療連携を考える」		
概　　要	研究所が中心となり進めている平成27年度地域志向教育研究「杏林大学と地域の医療情報ネットワーク構築に向けた検討」について研究所員で討議を行った。その検討の中で、地域のニーズと意識を正確に把握する必要があることが指摘され、本学周辺地域の医療機関・医師会へのアンケート調査を実施することになり、調査票の原案作成、調査のスケジュール調整などを行った。遅くとも11月中に調査票を配布し、翌年２月には調査結果のまとめを報告する講演会を開催することとした。		
参加人数	４名		

■第20回　杏林CCRC研究所セミナー

日　　時	平成27年11月６日(金)	場　　所	杏林CCRC研究所分室
講　　師	蒲生忍（杏林CCRC研究所所長）		
講演テーマ	「米国出張報告及びICTを活用した医療連携を考える」		
概　　要	蒲生は10月22日から28日まで米国に出張し、米国生命倫理学会の年次総会に出席し、米国での高齢社会における倫理的問題とDeath Educationなどに関する最新情報を収集した。本セミナーでは、その中で本COC事業と関連がある項目について報告した。それに続いて、「杏林大学と地域の医療情報ネットワーク構築に向けた検討」において実施するアンケート調査について、調査票の最終案をまとめる検討を行った。調査結果は２月27日午後、三鷹ネットワーク大学を会場として報告することとした。		
参加人数	４名		

■第21回　杏林CCRC研究所セミナー

日　　時	平成28年１月７日(木)	場　　所	杏林CCRC研究所分室
講　　師	長谷川利夫（杏林CCRC研究所副所長・杏林大学保健学部教授）		
講演テーマ	「平成27年度地域志向教育研究費　報告」		
概　　要	平成27年度地域志向教育研究費の研究成果の報告について長谷川氏より、「東京多摩地区の精神科病院の現状」と題した報告が行われた。		
参加人数	５名		

■第22回　杏林CCRC研究所セミナー

日　　時	平成28年１月12日(火)	場　　所	杏林CCRC研究所分室
講　　師	平野照之（杏林大学医学部教授）、山田　深（杏林大学医学部講師）		
講演テーマ	「平成27年度地域志向教育研究費　報告」		
概　　要	平野氏からは「脳卒中センター診療プロセスの検証と改善が健康寿命に与える効果」についてと題した報告が、山田氏からは「リハビリテーション医学・宇宙医学研究成果のアウトリーチ：宇宙飛行士の健康管理をモチーフとした地域における教育プログラムの実施」と題した報告がそれぞれ行われた。		
参加人数	６名		

■第23回　杏林CCRC研究所セミナー

日　　時	平成28年１月15日(金)	場　　所	杏林CCRC研究所分室
講　　師	大木幸子（杏林大学保健学部教授）		
講演テーマ	「平成27年度地域志向教育研究費　報告」		
概　　要	大木氏より「生活保護受給世帯の児童・若者支援における効果的な支援方法の検討」と題する報告が行われた。		
参加人数	６名		

■第24回　杏林CCRC研究所セミナー

日　　時	平成28年１月22日(金)	場　　所	杏林CCRC研究所分室
講　　師	太田ひろみ（杏林大学保健学部教授）		
講演テーマ	「平成27年度地域志向教育研究費　報告」		
概　　要	太田氏より「大学生と当事者の連携による発達障がい児の余暇活動支援ネットワーク生成に関する研究―アクションリサーチを通した実践研究―」と題する報告が行われた。		
参加人数	５名		

■第25回　杏林CCRC研究所セミナー

日　　時	平成28年１月26日(火)	場　　所	杏林CCRC研究所分室
講　　師	芝原美由紀（杏林大学保健学部教授）		
講演テーマ	「平成27年度地域志向教育研究費　報告」		
概　　要	芝原氏より「障がい者スポーツ『ボッチャ』による高齢者の体力づくり」と題する報告が行われた。		
参加人数	５名		

■第26回　杏林CCRC研究所セミナー

日　　時	平成28年１月29日(金)	場　　所	杏林CCRC研究所分室
講　　師	木暮健太郎（杏林大学総合政策学部准教授）、三浦秀之（杏林大学総合政策学部講師）		
講演テーマ	「平成27年度地域志向教育研究費　報告」		
概　　要	木暮氏からは「羽村市における若年層を中心とした地域活性化に関する研究」と題する報告が、三浦氏からは「東日本大震災時および復興過程における石巻市のコミュニティ組織の対応から得られる教訓と羽村市など近郊都市への適用」と題する報告がそれぞれ行われた。		
参加人数	６名		

3 研　究②

地域志向教育研究費について

■平成27年度　地域志向教育研究費

責任者	所属	職名	分担者	研究期間	研究テーマ	区分	項目
平野　照之	医学部	教授	医学部 講師　鈴木理恵子 医学部 助教　鳥居正剛 医学部 助教　岡野晴子	平成27年４月１日 ～平成28年３月31日	脳卒中センター診療プロセスの検証と改善が健康寿命に与える効果	一般	健康寿命延伸
山田　深	リハビリ医学	講師	保健学部 教授　八並光信 保健学部 助教　門馬 博	平成27年４月１日 ～平成28年３月31日	リハビリテーション医学・宇宙医学研究成果のアウトリーチ：宇宙飛行士の健康管理をモチーフとした地域における教育プログラムの実施	一般	健康寿命延伸
蒲生　忍	保健学部	教授	医学部 教授　吉野秀朗 CCRC研究所 特任助教　相見祐輝 CCRC研究所 特任助教　松井孝太	平成27年４月１日 ～平成28年３月31日	杏林大学と地域の医療情報ネットワーク構築に向けた検討	一般	持続的発展可能な少子高齢社会像の構築
大木　幸子	保健学部	教授	保健学部 准教授　片桐朝美	平成27年４月１日 ～平成28年３月31日	生活保護受給世帯の児童・若者支援における効果的な支援方法の検討	一般	健康寿命延伸
太田ひろみ	保健学部	教授	保健学部 准教授　朝野 聡 保健学部 教授　亀崎路子 保健学部 准教授　佐々木裕子 保健学部 助教　楠田美奈 保健学部 助教　太田真理子 保健学部 助教　大屋千鶴 外国語学部 准教授　井手拓郎	平成27年４月１日 ～平成28年３月31日	大学生と当事者の連携による発達障がい児の余暇活動支援の効果	一般	生きがい創出
芝原美由紀	保健学部	教授	保健学部 講師　一場友実	平成27年４月１日 ～平成28年３月31日	障がい者スポーツ「ボッチャ」による高齢者の体力づくり	一般	健康寿命延伸
三浦　秀之	総合政策学部	講師		平成27年４月１日 ～平成28年３月31日	東日本大震災時および復興過程における石巻市のコミュニティ組織の対応から得られる教訓と羽村市など近郊都市への適用	一般	災害に備えるまちづくり
木暮健太郎	総合政策学部	准教授		平成27年４月１日 ～平成28年３月31日	羽村市における若年層を中心とした地域活性化に関する研究	一般	生きがい創出
長谷川利夫	保健学部	教授	保健学部 講師　鈴木健太郎 にしの木クリニック　木村朋子	平成27年７月13日 ～平成27年12月21日	精神科病院訪問活動による地域の精神医療のあり方の検討	一般	健康寿命延伸

4 社会貢献活動　健康寿命延伸①

「生涯スポーツの機会提供」プログラム

■実施日：平成27年４月25日、５月17日、５月23日、
６月20日、７月11日、８月29日、
９月26日、10月11日、11月14日
平成28年１月30日、２月27日、３月12日
■担当者：石井　博之　保健学部 理学療法学科 准教授
楠田　美奈　保健学部 看護学科 助教
相原　圭太　保健学部 理学療法学科 助教
太田ひろみ　保健学部 看護学科 教授
大屋　千鶴　保健学部 看護学科 助教
古谷麻実子　保健学部 看護学科 学内講師

■目　　的

本プログラムは昨年度から開始したもので、その目的は、今まであまり運動する機会を持たずに来た中高齢者に対して、運動を始めるきっかけ作りや運動の継続支援、個々の目的に合わせた運動プログラムの提供などを行うことにある。本学保健学部の専門性を活かした、そうしたさまざまなサポートを通じて地域住民の健康寿命を延ばし、少しでも長く活力のある生活を楽しんでもらえたら、と願いつつ取り組みに力を入れている。

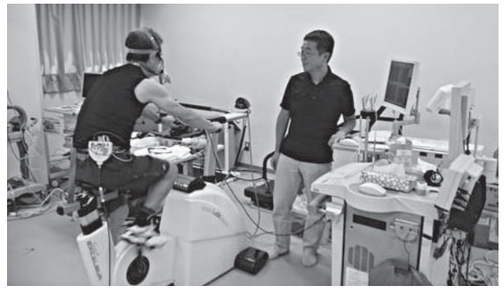
■実施内容

本プログラムは、羽村市保健センターおよび羽村市スポーツセンターと共同で実施しているもので、その内容としてはまず、運動負荷試験による体力測定に基づく至適運動強度の提言と運動相談に対するアドバイスがある。また、個別の問題点を聞き、身体機能評価を行った上で、個別のホームエクササイズを主体としたトレーニングプログラムの設定なども行った。状況に応じて、文部科学省「新体力テスト実施要項」などを用いた集団体力測定や体脂肪測定等も行い、必要に応じて健康維持のための運動をアドバイスした。

さらに、日常の運動の多様性を増やすために、ポールウォーキングやノルディックウォーキングの講習会「歩こう会」も実施した。また５月17日と10月11日には、羽村市主催の羽村健康フェアにおいて学生によるロコモチェックと体力測定および教員による健康相談、ロコモミニ講座も実施した。

■実施効果

いずれのプログラムにおいても、複数の担当教員に個別の役割はなく、共同で実施し、それぞれが市民１人１人に運動相談や体力評価を行っているので、参加者の満足度は高いように感じている。また、羽村市健康フェアでのロコモ相談、ロコモミニ講座、体力測定などには60～70名の参加者があり、健康に対する市民の意識の高さを実感すると同時に、もっと様々な工夫を凝らして期待に応えていきたいと考えている。


心肺運動負荷試験による体力測定の様子

健康と運動に関する個別相談の様子

歩こう会（ポールウオーキングやノルディックウオーキング体験会）の様子

5 社会貢献活動 健康寿命延伸②

障がい者スポーツの普及・参加支援

■実施日：平成27年10月31日、11月７日
■担当者：一場　友実　保健学部 理学療法学科 講師
　　芝原美由紀　保健学部 理学療法学科 教授

■目　　的

パラリンピックの開催により、今でこそ障がい者スポーツも広く知られるようになってきている。しかし、実際にどんな競技があるのか、選手たちはどこで活動しているのかなどについては十分には知られていない。現状としては、障がい者が練習として使用可能な施設は限られており、十分な練習時間や場所が確保できていない。実際、選手たちからも練習施設を充実させていただくと同時に、ボランティアの方々にサポートしていただけるととても助かるという声を耳にする。そこで、地域の障がい者がどのようにスポーツに参加しているのか、またどのような支援を必要としているのかを広く地域の方々に知っていただける機会を設け、障がい者スポーツの普及・支援を行っていきたいと考えた。

■実施内容

障がい者スポーツでパラリンピックの正式種目である「ボッチャ」について多くの方々に知っていただくべく、地域住民と本学学生を対象に講習をしていただいた。10月31日に跡見学長、11月７日にはポールスノードン副学長も参加していただいた。その内容はまず、パラリンピックに出場経験のある強化選手（Noble Wings所属）による講演と実際の試合の様子の披露があり、その後、地域の方々との交流を深めるために実際に「ボッチャ」の競技を経験していただいた。この活動には、パラリンピックに選手として出場した経験のある車椅子の講師も招聘し、また日本ボッチャ協会公認上級審判を取得している10名の本学学生には地域住民への競技の説明や補助、さらには運営補助も行ってもらった。

■実施効果

地域の方々には、「ボッチャ」についての興味と関心を持っていただくと同時に、障がい者スポーツに対する理解もある程度は深めていただくことができた。同時に、本学学生にとっては「ボッチャ」競技技術の共有、審判員としての技術・能力の向上を図ることができ、実際のパラリンピックでの国際審判の取得に向けた活動への一助ともなった。

跡見学長、Noble Wingsの選手、参加者、学生との全体写真

6 社会貢献活動 健康寿命延伸③

「平岡町わくわく健幸教室」のフォローアップ

■実施日：平成27年４月25日、５月23日、６月27日、
　　９月26日
　　平成28年１月23日
■担当者：榎本雪絵　保健学部 理学療法学科 准教授

■目　　的

「平岡町わくわく健幸教室」は、平岡町在住の高齢者（平岡町老友クラブ会員）の健康増進を図るために2013年７月から開催されている。同年11月より本学学生が参加するようになり、2014年７月より会員による自主運営となった。今年度の介入の目的は、自主運営化後の参加者状況、運動プログラムなどの実施状況を確認し、必要に応じてプログラムの修正やリーダー研修などを行うことである。同時に、参加学生の教育、ボランティア育成も行う。

■実施内容

４月には、前回から約３か月後のフォローアップとして、参加者や教室の実施状況の確認と、「バイタルサインについて」という健康講座と柔軟体操の指導を行った。学生には、参加者への関わり方、動作介助などを指導した。

５月には、修正した運動プログラムのDVDを用いた柔軟体操やセラバンド体操を行った。学生に対しては、マンツーマンで参加者に対応させ、実際に脈拍測定、ストレッチや関節運動の補助を行ってもらった。

６月には、自主運営化約１年後の参加者の身体機能の変化を確認するために、体力測定をするとともに動画撮影も行い、参加者自身が姿勢や移動の様子を確認できるようにした。学生には体力測定の実践、測定結果の記録、参加者の生活状況の聴取などを行ってもらった。

2016年１月には、体力測定会を実施し、その結果に示される身体機能の変化についての確認を行った。学生には、前回の活動内容以外に、これまでの教室の開催状況と今後について、参加者との会議をしてもらった。

■実施効果

参加者からは、「学生の皆さんに熱心に対応してもらって嬉しい」「久しぶりの測定だけど、良い結果が出て嬉しい」「励みになる」「これからも頑張ります」というような言葉が聞かれているので、満足のいく１年間の活動だった。

一方、学生からは、「非常に勉強になった」「知識不足を実感した」などという言葉が聞かれたので、参加学生の教育、ボランティアの育成という年間目標はある程度達成できたのではないかと考えている。

そういう意味では、今年度の介入には大きな意義があったのではないかと思う。

セラバンド体操を学生が補助している様子

学生が体力測定を実施している様子

7 社会貢献活動 健康寿命延伸④

市民と多職種で地域包括ケアを考える参加型ワークショップ「たまケアLive」の企画と運営

■実施日：平成27年10月16日
■担当者：柴崎美紀　保健学部 看護学科 講師

■目　　的

「たまケアLive」というのは、「私の街の次世代リーダーになる」を運営理念とする多摩地域の多職種協働研修会であり、医療・介護・福祉などの専門職としてだけではなく、１人の地域住民として街に何ができるかを考え、アクションを起こせる人材育成を目指している。これまでさまざまなイベントが企画・運営されてきたが、今回は市民と多職種で地域包括ケアを考える参加型ワークショップを企画し、運営した。

■実施内容

今回のワークショップは、〈たまLANプロジェクト！どうする？DOする！～市民と専門職が一緒に聴いて、話して、考えよう、地域でゆるく繋がろう～〉というテーマで開催した。第一部では、地域で活躍している４人の専門職を講師に招き、「自宅で暮らせなくなったらどうする？」「わからなくなったらどうする？」「食べられなくなったらどうする？」「歩けなくなったらどうする？」という４つのテーマについてのシンポジウムを行った。そして第二部では、参加者の居住地域で区分けしたグループでワールドカフェを行った。

■実施効果

今回のワークショップには、27名の医療専門職、26名の市民、12名の運営メンバー、計65名が参加した。そのうち本学からの参加者は３名だった。第一部、第二部を通して、市民の意見に専門職が「気付き」をもらう場面が多かったこともあり、「医療・介護専門職だけでは地域の問題を解決することはできない、専門職自身が市民であるという自覚を持ち、市民の意見を汲み取らなければならない」という思いを専門職が共有することができた。これは大きな成果だった。

第二部で行ったグループワークの様子。市民、行政、専門職が真剣に語り合う時間を持つことができた。

8 社会貢献活動 生きがい創出①

子育て支援プログラム

1

多胎育児支援活動

①「多胎育児準備クラス」
②「ツインズマーケット」

■実施日：①平成27年７月４日、７月11日
　　平成27年10月24日、10月31日
　　平成28年１月９日、１月16日
　　②平成28年３月５日
■担当者：太田ひろみ　保健学部 看護学科 教授
　　佐々木裕子　保健学部 看護学科 准教授
　　山内　亮子　保健学部 看護学科 学内講師
　　鈴木　朋子　保健学部 看護学科 助教

■目　　的

①**「多胎育児準備クラス」** 多胎妊娠中の妊婦や家族と医療・看護の専門職や多胎育児経験者との交流の場として提供している。そこでの交流を通じて、多胎児特有の不安や問題の解決、ならびに多胎児の親同士の交流を深めてもらうのが目的である。

②**「ツインズマーケット」** 本学三鷹キャンパスにおいて、多胎育児中の家族が年に一度集まり、相互支援・教育を行うことを目的としている。

■実施内容

①**「多胎育児準備クラス」** 平成27年７月、10月、平成28年１月にそれぞれ２回ずつ開催し、産科医師や助産師による講義ならびに多胎育児経験者による講話・交流会を行った。

②**「ツインズマーケット」** 前半では「応用行動分析（ABA）から子育てを学ぼう」をテーマに、小児科医師の佐々木匡子先生による講演会を、後半ではグループワークを行った。

■実施効果

①**「多胎育児準備クラス」** 多胎妊娠中の妊婦や家族にとっては、産科医師や助産師からは妊娠期の生活や出産についての講義を受け、多胎育児経験者からは貴重な体験談を聞くことができ、出産・育児の具体的なイメージ作りの一助となっていることが伺えた。

②**「ツインズマーケット」** 参加者からは、「今悩んでいることにどう対応したらいいかという話を聞いて、目からうろこが落ちるような気がした」、「とても勉強になった。これからの子育てに活かしていきたい」等の感想が聞かれ、所期の成果が得られたものと考えている。

胎児育児準備クラス　父親グループワーク

ツインズマーケット

2

極低出生体重児の育児支援サークル「ぴあんず」

■実施日：平成27年５月16日、７月18日、10月17日
　　平成28年２月27日
■担当者：吉野　純　保健学部 看護学科看護学専攻 准教授
　　岩田洋子　保健学部 看護学科看護学専攻 講師
　　中村明子　保健学部 看護学科看護学専攻 助教

■目　　的

本学医学部付属病院内ボランティア団体「ぴあんず」を中心に、1800ｇ未満で出生し、NICU／GCUを退院した極低出生体重児と家族を対象に育児を支援することが活動の目的である。年に４回ほど、専門家による講習や相談を実施し、その間、学生が子どもを預かり、遊びや授乳を行う。家族にとっては知識や情報を得たり、心理的ケアとピアサポートを受けられる場であり、子どもにとっては、親と離れて仲間と触れ合う時間を過ごすことができる場になっている。

■実施内容

●１回目（平成27年５月16日）
講師を招いての就園・就学に関する勉強会

●２回目（平成27年７月18日）
「フリートーク」 親には子どもの年代別（学童期、乳幼児期）に分かれてもらい自由に話し合ってもらった。学童期の子供の親たちは就学、学習、集団生活を、乳幼児期の子どもの親たちは発育、発達、食事などを話題にしていた。

●３回目（平成27年10月17日）
「低出生体重児の発達とリハビリについて」というテーマのもと、付属病院の言語療法士（ST）より「食べることの成長」、理学療法士（PT）より「子どもの遊び」についてそれぞれ講義があった。講義後、それぞれの親が抱える悩みや問題について質疑応答が行われた。

●４回目（平成28年２月27日）
「フリートーク」 親が乳児と乳児以降のグループに分かれ、それぞれに悩みや相談事について自由に話し合った。NICU看護師、医師もその中に入り、親同士の情報交換やアドバイスなどを中心にトークが交わされた。その間、学生が別室に子どもたちを預かり、安全、発達に配慮して一緒に遊んであげた。

■実施効果

専門家による講義では、真剣に耳を傾ける参加者の姿が多く見受けられた。また、フリートークでは積極的な質疑応答があり、参加者の関心の高さがうかがわれた。

学生による育児支援では、子どもたちとの触れ合いの中で、自分の身体、感覚を使って、考えながら行動する姿が見られ、とても良い学習体験になった。

ボランティア学生の保育の様子

9 社会貢献活動 生きがい創出②

住み慣れた地域で過ごすための「在宅・あぷりこツーカーチーム（仮称）」作り

■実施日：平成27年５月19日、７月29日、10月21日、
　　11月18日
　　平成28年１月15日、２月３日
■担当者：大金ひろみ　保健学部 看護学科 准教授
　　高崎由佳理　医学部付属病院 副看護部長

■目　　的

退院・外来通院する方々が、自宅で安心して生活できるように、病院内外の看護及び福祉の専門職による連携活動を促進することを目的としている。退院支援の質の向上、病院と地域の専門職がかかわった患者・家族の「その後」がわかる連携を目指す組織として「在宅･あぷりこツーカーチーム」のベースを作る。

■実施内容

本学と地域の看護連携活動の促進を目的に、本学付属病院退院後の患者が利用する４カ所の訪問看護事業所で事例検討を行った。具体的な事例としては、本学病院内科系共同個室病棟を退院した膀胱がん患者のケースと、本学病院外科系病棟を退院した胃がん患者のケース等を取り上げた。

また、本学病院の退院支援リンクナースおよび近隣病院の看護師を対象に「退院支援リンクナース研修　公開講演会」も開催した。

■実施効果

病院・在宅における家族支援の違い、退院支援においてどこでどう過ごすか、本人・家族と話すことの重要性について学び合うことができた。また、「院外の人の話が聞けたり、院内でも異なる配属先の人と話ができたりして良かった」「日頃のカンファレンスや連携の重要性に気づかされた」というようなコメントも寄せられた。

ディスカッションの様子

公開講演会の様子

10 社会貢献活動 生きがい創出③

杏林大学・三鷹ネットワーク大学共催「私の案内書作り」講座

■実施日：１回目　平成27年９月10日
　　２回目　平成27年９月17日
　　３回目　平成27年９月24日
■担当者：兎澤　惠子　保健学部 看護学科 教授
　　渡辺　洋子　保健学部 看護学科 講師
　　古谷麻実子　保健学部 看護学科 学内講師

■目　　的

高齢者１人１人が、定年後の20～30年間を自分らしく過ごすためにはどうしたらいいのか、ということを健康である間に高齢者自らが考える機会を用意しサポートすることが目的である。具体的には、自分の生活習慣や好みなどを記録したノート「私の案内書」を作成することにより、価値観の再認識・再検討を行うとともに、意思伝達能力の低下時に、家族や医療従事者、介護者などに意思や個別性を伝える際に活用できるようにすることを目指す。

■実施内容

三鷹ネットワーク大学との共催により、90分の講座を３回にわたり行った。

●１回目

「私の案内書作り」講座の目的と意義、時代背景および加齢変化について、また、なぜ今のうちに準備する必要があるのかということなどについて、具体的に事例を用いながら説明を行った。

●２回目

「今までの普段の生活の中で自分が大切にしてきたこと」を想起しながら、自分の行動や価値観を規定している自分らしさについて再確認あるいは再発見する機会とした。たとえば、「食べ物は何が好きか？」「どのようなタイプの寝具で安眠できるか」「お風呂の湯の温度はぬるめが好きか、熱めが好きか？」「趣味や得意なことは何か」などと身近な素材を通して思い起こしてみることによって、物心がついてからの自分というものを把握することができる。

参加者は、これからの生き方に活力を見出していくきっかけとするために案内書作りに挑んだ。また、専門家より自己表現の１つとしてのエッセイの意義や書き方の基本についての説明を受け、同時に次回までに作品を１つ書くことを課題として与えられた。

●３回目

ワークショップ、集団および個別対応により案内書作りを進めた。「今後どのように過ごしたいか」という視点から、前回書きこんだ内容について加筆・修正を行った。最後に、受講者全員が３回にわたった講座の内容について感想を述べ合い、講師がコメントをひとこと付け加えることで終了した。

■実施効果

参加者は、今までの自分というものを改めてきちんと振り返ってみたいという強い思いを持っていて、その思いを満たすべく楽しみながらも、真剣に課題に取り組んでいた。その姿がとても印象的だった。また、「老夫婦二人で今後、どのようにしていったらよいのかという問題に真剣に向き合えるようになった」「新しい気付きもあり、これを機会に、今後に向けて再スタートを切りたい」などという感想が聞かれ、それぞれが講座を通じて自分のために大事な何かを得たことが伺われた。

アシスタントを務めてくれた学生たちは、会場でのさまざまなサポートを通じて、参加者が生きてきた時代背景や、老年期になると、自分の人生を振り返りたくなること、将来への不安を持つことなどについて学ぶことができたものと思われる。

参加者の受講の様子

看護学科の参加学生

11 社会貢献活動 災害に備えるまちづくり①

防災ふれあいフェア等防災プログラム

1

防災ふれあいフェア

■実施日：平成27年10月18日（＊事前準備10月17日）
■担当者：和田　貴子　保健学部 救急救命学科 教授
　　川村　治子　保健学部 救急救命学科 教授
　　阪本奈美子　保健学部 救急救命学科 教授
　　山﨑　章彦　保健学部 救急救命学科 助教
　　井田　善明　保健学部 救急救命学科 助教
　　神山麻由子　保健学部 救急救命学科 助教
　　久保佑美子　保健学部 救急救命学科 助教
　　久米　梢子　保健学部 救急救命学科 助教

■目　　的

「防災ふれあいフェア」は、本学保健学部救急救命学科における教育・研究の成果を訓練の場に活かし、家族で楽しみながら防災意識を高めてもらおうという趣旨のもと、八王子消防署との共催により、本学八王子キャンパスで行われた。

■実施内容

八王子キャンパスの校舎前の広場や教室を使って、起震車による地震体験、初期消火訓練、放水訓練、火災発見大声通報訓練、レスキュー訓練、はしご車搭乗体験、ロープ渡り体験など盛りだくさんのイベントが展開された。当日は、300名を超える親子連れが会場を訪れ、にぎやかな雰囲気の中でさまざまな防災の訓練や体験に真剣に取り組んでいた。

■実施効果

本イベントは、本学の「地（知）の拠点整備事業」のテーマの１つである「災害に備えるまちづくり」事業の一環として実施したものであり、本学の防災への取り組みを広く周知できた。また、救急救命学科の学生にとっては、モチベーション向上の貴重な機会となった。

メイン会場

開始時の挨拶

梯子車による救出訓練

ロープ降下する署員

2

BLS指導等による実践的な災害対応能力の向上

[八王子消防団員に対する普通救命講習指導]

■実施日：①平成27年４月19日　八王子市消防団 第11分団員　47名
②平成27年４月23日　八王子市役所 職員　43名
八王子市消防団員　２名
③平成27年５月12日　八王子市役所 職員　50名
八王子市消防団員　３名
④平成27年５月19日　八王子市役所 職員　47名
⑤平成27年６月18日　八王子市役所 職員　54名
八王子市消防団員　２名
⑥平成27年７月16日　女性防火協会 会員（八王子市）　40名
八王子市消防団員　２名
⑦平成27年７月23日　八王子市役所 職員　33名
八王子市消防団員　２名
⑧平成27年11月12日　八王子市役所 職員　46名
八王子市消防団員　１名

[加住中学校教員に対する応急手当指導]

■実施日：平成27年６月２日　18名

[美山中学校教員に対する応急手当指導]

■実施日：平成27年６月16日　12名

■担当者：和田　貴子　保健学部 救急救命学科 教授
原田　利雄　保健学部 救急救命学科 非常勤
井田　喜昭　保健学部 救急救命学科 助教
大野　誠　保健学部 救急救命学科 助教

■目　的

本学保健学部は、地域に密着した社会貢献事業の一環として、中高生や教員をはじめ、市役所や市立学校の職員などに普通救命講習指導を行っている。救命手当のうち特に生命を救うために必要な技術や知識を、実技についての講習と指導を通して学んでもらい、救命に備える意識を高めてもらうことを目的としている。

■実施内容

生命を救うための重要な応急手当としては、心肺蘇生法とAED（自動体外式除細動器）を効果的に使用しなければならない。そこで、いずれの講習指導においても、傷病者の周囲と傷病者の観察要領、人形を使った心肺蘇生法の実技やAEDの使用方法の説明と実技、参加者１人１人に対する個別指導に力点を置いた。

■実施効果

救命手当というのは、実際に体験して、実技を身に付けることが大事であり、参加者は指導者の説明に真剣に耳を傾け、積極的に実技に取り組んでいた。講習を終えた参加者からは、「これできっと、いざという時も慌てずに落ち着いて適切な対応ができると思います」という声が聞かれた。

６月18日　八王子市職員への普通救命指導

八王子市職員に対する救命講習

八王子市女性防火協会会員に対する普通救命指導

3

第66回全関東八王子夢街道駅伝競走大会における応急救護活動等への参加

■実施日：平成28年２月14日
■担当者：和田　貴子　保健学部 救急救命学科 教授
千田　晋治　保健学部 救急救命学科 講師
中島　義夫　保健学部 救急救命学科 助教
山﨑　章彦　保健学部 救急救命学科 助教

■目　的

公道を走る駅伝大会としては国内最大規模を誇る「第66回全関東八王子夢街道駅伝競走大会」の開催に伴い、八王子消防署と連携の下、救護所における応急救護を担当し、駅伝競走大会参加者の安心と安全の確保を図ることを目的に実施した。

■実施内容

513チーム約2,000名が参加した。チーム内訳は、一般男子の部・大学男子の部・高校男子の部・市内中学男子の部・一般女子の部・高校女子の部・市内中学女子の部であった。他に競技役員・コース整理担当等ボランティアが多数参加した。

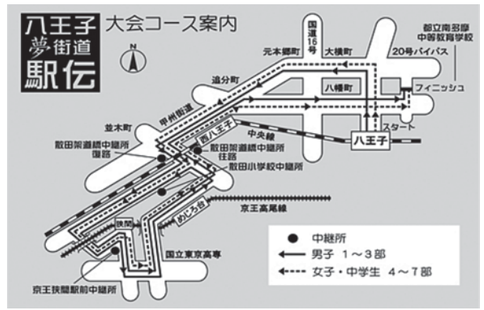
具体的には当大学では八王子市からの依頼に基づき、次の活動を実施した。

①教員３名は、大会本部の救護所において救護活動及び現地救護所で救護活動を行う学生に対する監督及び指導を行った。
②救護所担当は、駅伝の出発点及び中継所となる場所に八王子消防署警戒員と連携し救護所を設置、不測の事態に備えた。大会本部のある南多摩高校敷地内に本部救護所を設置し教員３名と学生４名で対応、中散田中継所に中散田救護所を設置し学生３名を配置対応、散田小学校中継所に散田小学校救護所を設置し学生３名を配置対応、京王狭間駅前中継所に狭間駅前救護御所を設置し学生３名で対応した。

■実施効果

八王子消防署との連携の下、救護所における応急救護を担当した。大きな事故等の発生はなく、駅伝競走大会参加者等の安全の確保を図ることができ、駅伝大会成功の一助となった。

駅伝競走大会に救護所担当として参加した、教員と学生



第66回全関東八王子夢街道駅伝競走大会コース案内

さらなる発信力のあるCOC事業・地域貢献活動への展開

地域・大学間コーディネーター　井上　晶子

この３年間、「教育の地域志向化」が多岐にわたって進められ、その成果として、学生の地域への関心の高まり、地域に向ける視点の広がり、地域に向かうアクティブな姿勢など、多くの変化が見られている。

学生は、政策決定の場にも参画し、手順を踏んで決定された政策の中で自分たちの暮らしが成り立っていることを知ったという。地域活性化を目指す各種プロジェクトに計画段階から加わることで、地域課題を巡る様々な考えを一つにまとめ実現に結びつけるプロセスの大変さを学んだという。自分の発言や行動が生かされる喜びを実感すると同時に、自己と向き合うことで、自分が社会的にどのような存在かを自覚させられたともいう。

今、学生は、教室から地域に向かい、地域によって大きく育てられ、地域とのかかわりを通して、将来に向けての方向性や目的を見出そうとしている。それは、学内教育と学外での活動が有機的に結びつくCOC事業によって得られた成果と考えている。

ここでのコーディネーターの役割は、学生が活動する場も教育の場であることを自治体や地域の人々に伝え、学生には、活動の場を提供し、地域は行動を通して学ぶ杏林大学の第２の教室であることを伝えるものであった。また、COC事業成果のアウトプットと地域ニーズのインプットといった双方向性を持つ事業の企画・実施により大学と地域の一体化を図ることであった。

現在、自治体、地域住民や諸団体からの大学に対する期待はますます大きく、その内容も、政策立案から実施、地域活性化事業の企画から具体化、個人の生きがい創出の学びから実践など、多様化している。これら地域・社会の課題に対し、地域との「共創」を前提とした取り組みが、持続性のある活動につながるにはいくつかの問題がある。

COC事業に関する学内教育や研究に取り組む先生方の広がりが見られるが、社会貢献活動の自発性においてはまだ範囲が限られていること、また、どちらかと言えば、大学側発信ではなく地域側発信の事業対応が多かったことである。

28年度のコーディネーターの課題は、今までの地域ニーズと先生や学生のニーズをマッチングさせる活動に加えて、「産」からのニーズを積極的に掘り起こし、杏林大学の知による「杏林大学発」の「産学官民連携事業」、すなわち、受信から強力な発信力を持つCOC事業展開に向けていかにコーディネートしていくかである。

COC事業の積極的展開の延長線上には、これからの社会全体の課題に対応可能な戦略・戦術を備えた学生の成熟があることを再認識したい。

第３回杏林CCRCラウンドテーブル・第４回CCRCフォーラムを開催

平成28年２月13日（土）、羽村市生涯学習センター「ゆとろぎ」にて、27年度の本学COC事業をめぐり連携３市との間で意見交換する第３回杏林CCRCラウンドテーブル・第４回CCRCフォーラムが開催された。連携市からは羽村市長、三鷹市長、八王子市長代理など約20名が、本学からは副理事長、学長をはじめとして24名が出席した。

CCRCフォーラムでは、はじめに跡見学長が本学COC事業の経緯を説明したうえで、今後も地域との連携を推進して行く考えを示された。続いて本学から「大学全体および教育の地域志向化」、「研究」、「社会貢献」の３つの観点から27年度の活動実績が報告された。まず、「大学全体・教育」については地域交流推進室長の古本から、実際の活動を例に挙げて、大学をあげて地域との連携に取り組んでいることや、次年度には各学部の「地域と大学」の講義の一部を４学部合同で実施することなど新たな展開についても報告がなされた。

「研究」については、杏林CCRC研究所所長の蒲生から同研究所の具体的な「知」の発信例の紹介と、「持続可能な都市型高齢社会の実現を目指す」という杏林CCRC構想のもと、来年度以降も活動を継続していく考えが示された。「社会貢献」については、地域交流推進室副室長の石井から、三鷹市での子育て支援プログラム、羽村市での生涯スポーツの機会提供プログラム、八王子市でのAED指導・応急救護指導などの地域活動の実践例が紹介された。

以上の実績報告に対して、羽村市長、三鷹市長、八王子市長代理らから意見が述べられ、“地域の元気”に結びついている本学COC事業に対するさらなる期待の言葉が寄せられた。

杏林CCRCラウンドテーブルにおいては、まず第１部で松田副理事長や跡見学長等と３市の市長等による懇談が行われた。そして第２部では、それぞれの実務担当者が一堂に会し、具体的な活動事例をもとに、今後の事業の発展に向けて意見が交わされた。

本学側からは、自治体に対して、協働による各活動のブラッシュアップとともに「学生の地域活動への参加は社会からの学びとなって反映させなければいけないので、学生を育てるという視点で協力をお願いしたい」との要請がなされた。一方、自治体側からは各市の事業への本学のさらなる協力が求められると同時に、「学生にとり活動参加は真に糧とならなければいけない。地域でもまれて社会に出ることが必要であり、大学にとっても自治体にとっても良い関係を続けていきたい」という意見なども寄せられた。

また、本学が課題の１つにしている「生きがいづくりコーディネーター制度」については、前向きに検討するという意見があった一方、「地域住民にとっては曜日面、時間等でハードルが高い点もある」という意見もあり、今後の課題として残ることになった。最後に、地域交流推進室長の古本が「29年度までの補助事業が終わった後、事業をどう継続させていくかは新年度以降に考えたい」と述べ、この日の日程がすべて終了した。

ラウンドテーブルでの意見交換の様子

羽村市・並木心市長

三鷹市・清原慶子市長

八王子市・大野部長

「杏林・羽村コモンズ2015　つながる地域と大学　～羽村が杏林大学のフィールド～」の開催

平成27年９月12日（土）、13日（日）の２日間にわたり、本学と羽村市は「杏林・羽村コモンズ2015　つながる地域と大学～羽村が杏林大学のフィールド～」を羽村市生涯学習センターゆとろぎにて開催した。

本学と羽村市は、相互の資源および研究成果などの交流を促進し、活力ある地域社会の創造、人材育成および両者の発展に資することを目的に、平成22年６月に包括的な連携協定を締結した。それを機に、教育、生涯学習、まちづくり、健康・福祉などさまざまな分野で連携した取り組みを展開してきた。また、文部科学省の補助事業である「地（知）の拠点整備事業」に共同応募し、補助採択を受けたのを契機に、連携事業では大きな広がりが生まれている。

本学と羽村市とのこれまでのそうした取り組みを紹介し、今後、連携活動の輪をさらに広げ、継続性のあるものにするために、交流・意見交換を行うことを目的として開催したのが「杏林・羽村コモンズ2015」である。

12日には、羽村市から並木市長や羽村市議会の石居尚郎議長、本学より松田副理事長、跡見学長、スノードン副学長など多数の方の列席のもと、開会式が執り行われた。開会の挨拶は、跡見学長、並木市長、松田副理事長の３氏によって行われた。

その後、学生と教員が市内で行った活動の発表が行われた。総合政策学部木暮ゼミの学生５名による「はむら若者フォーラム」、保健学部石井准教授と３名の理学療法学科生による「スポーツ機会提供プログラム」、外国語学部井手ゼミ６名による「商店街活性化プロジェクト」、外国語学部坂本ゼミ４名による「羽村市の外国人観光客増加のための提案」の発表があり、市役所の方にご指導いただいたことや市民との交流について報告がなされた。

また、杏林大学教員・市民の代表者・市職員による「連携から共生へ」というテーマのトークセッションも行われた。このトークセッションでは、総合政策学部の進邦教授がコーディネーターを務め、外国語学部の古本准教授、羽村市企画総務部長などがパネリストとして参加し、地域における今後の取り組みについて考え、活発なやり取りが行われた。

13日には、『Takeout Campus』と題した４学部による公開講座を行った。１限目のスノードン副学長は「日本語のローマ字、外国語のカタカナ書き」をテーマに、表記上の注意点について講義した。２限目の総合政策学部の岩隈准教授は「プライバシー・個人情報保護とマイナンバー制度」をテーマに取り上げた。３限目の救急救命学科の千田講師は「災害から命を守るための救急法」をテーマに、実際に起こった豪雨による堤防決壊を事例として取り上げ、いかに対応するかについて話をした。４限目の医学部の吉田講師は「病気にかかりにくい生活習慣―がん・心筋梗塞・脳卒中―」をテーマに講義した。

いずれの講座も、受講者が定員を上回るという人気ぶりであり、しかも全員が興味津々の面持ちで、真剣に耳を傾けていた。

こうして「杏林・羽村コモンズ2015」は大盛況のうちに終了した。

跡見学長のあいさつ

学生の発表の様子

パネルの展示風景

杏林・羽村コモンズ 2015
ポスター

第５回大学コンソーシアム八王子FD・SDフォーラムとCOC関連FD・SD研修会を開催

●大学コンソーシアム八王子FD・SDフォーラム分科会担当

平成27年８月28日（金）・29日（土）の２日間にわたり、第５回大学コンソーシアム八王子FD・SDフォーラム「大学改革を支える新しいFD・SD―ガバナンス改革を教職員成長のトリガーに」が、学園都市センターで開催された。１日目には基調講演や対談が行われ、２日目には５つの分科会が開かれたが、本学はそのうちの第５分科会を担当し、「地域と大学―地域に貢献する連携について本音で語る―」という大胆なテーマを設定した。

まずはじめに、本学の「地（知）の拠点整備事業」の先進的な取り組みについて古本地域交流推進室長が説明した。次いで、各学部の学生10名と、保健学部の太田教授、榎本准教授、総合政策学部の木暮准教授が地域貢献活動の成果発表を行った。これらの発表は、分科会に参加した学校にとっては今後のモデルとなるものだったので、非常に高い関心を持たれた。

成果発表に続いて、「大きな成果を得ることができているけれども……」ということを前提として、井上地域・大学間コーディネーター、八王子市役所の職員、大学とともに活動を行っている羽村市民、八王子市民がそれぞれの立場から忌憚のない意見を述べた。具体的には、「内」の連携、「外」の連携についての課題や今後の方向性などが主として語られた。

その後、そうした意見を受ける形で、総合政策学部の進邦教授がワークショップを開催した。そこでは議論が噴出し、各参加校にとっては意義深い研修となった。

●COC関連FD・SD研修会の開催

平成28年３月３日（木）、八王子キャンパスにおいて、地域課題へ取り組んでいる行政関係者や住民とのコミュニケーション手法やコーディネート手法を学ぶことを目的としてFD・SD研修を開催した。問題発見・解決のプロセスとその手法の経験を通して、ワールドカフェをはじめとする新たな教育手法の理解を得るとともに、地域活動の実践にも活かせる連携活性化を目指した研修内容である。

地域づくり支援、ファシリテーター育成支援、イノベーション人材育成支援などを手掛ける㈱キュムラス・インスティチュートの代表取締役を努める岩井秀樹氏を講師としてお招きし、「複雑課題への解決方法～ホールシステム・アプローチ～」と題して講義とグループワークを行った。実践を取り入れながら行う授業機会が多くなり地域と連携した交流活動が増える中、本研修会は問題を解決していく方法を理論と実践を組みあわせて触れる機会となった。グループメンバーとコミュニケーションを取りながら、アイディア出しや会話の重要性を楽しみながら学ぶことができたとの意見が多く挙がった。開催時期は八王子キャンパスの移転を目前とした引っ越し作業の最中ではあったにも関わらず、学長を含む46名が参加し、普段なかなか交流のない他学部の教員や職員同士が意見を交換しあう貴重な機会となった。

今後も教育の改善に資することを目的に、このような機会を設けていく予定である。

ワークショップを担当する様子

FD・SD 研修でのグループワークの様子

15 全　体④

杏林大学　地（知）の拠点整備事業
平成26年度事業に係る第三者評価報告書

Ⅰ．第三者評価委員会の開催概要

■日　時：平成27年９月１日（火）14：00～16：00
■場　所：杏林大学三鷹キャンパス　11階　貴賓室
■第三者評価委員（敬称略）：
　井藤英喜先生（東京都健康長寿医療センター理事長）
　関谷　博先生（羽村市社会福祉協議会顧問）
　中村秀一先生
　（一般社団法人医療介護福祉政策研究フォーラム理事長）
■評価根拠資料：
　①地（知）の拠点整備事業申請書
　②平成26年度大学改革推進等補助金調書
　③平成26年度実績報告書
　④平成26年度事業成果報告書
　⑤杏林CCRC研究所紀要
　⑥杏林医学会雑誌「杏林大学と地域医療」

Ⅱ．第三者評価報告書

平成26年度事業報告をもとに、第三者評価委員から以下のように事業成果に対する評価、意見、助言を受けた。

１．総括的評価

平成26年度は、平成25年度に引き続き、教育、研究、社会貢献のそれぞれの分野で活発に事業、各種の取り組みが行われ高く評価できる。杏林大学は、次年度八王子キャンパスにある保健学部・総合政策学部・外国語学部・大学院の三鷹キャンパスへの移転が予定されているが、そのことが今後の本事業の推進に悪影響を与えないように十分に配慮し、次年度もこれまで同様活発な活動を維持していただきたい。

本年度も昨年同様、いかに市民にCOC（Center of Community）事業を知ってもらえるかが継続した課題となっており、解決したとは言い難い。同時にCCRC（Center for Comprehensive Regional Collaboration）活動を展開しながら、各学部の中にCCRC事業の伝統が残るように本事業の継続のための責任体制を明確にするとともに、各事業の効果を評価・改善し、より効果的な事業とするための数値に基づくPDCAサイクルを構築するべきである。COC事業を、杏林大学のバックボーンとなるような体制作りの出発点としてほしい。次年度は補助金終了後も諸活動が継続できるよう着地点を見極めていく時期にあたると思われる。あれをやったこれをやっただけで事業が終わるということにならないようにすべきである。その意味で、行政や地域で抱えている問題についての、自治体向けの定期的な相談体制の整備は、こうした事業を大学に根付かせるひとつの策になるので検討してほしい。

２．［教育］地域に対する意識向上のための科目（地域志向科目）の設定と運営実績

学生による問題点の発掘と、その解決策の提案というプロセスを経ないといけないだろう。常に課題や問題点が提示されていて、ただ解決すればいいだけの問題ではないはずである。学生の問題解決力を鍛えるためには調査を含めて、地域の方と交流する中からどのようにして問題点をキャッチするのかを勉強させないと実用的ではない。模擬的に地域に出て行く際に何かひとつ調査をさせて問題点を発掘させるなどの過程を踏んで問題解決を進めていくことを経験させることが肝要と思われる。

医学部保健学部では、将来的に地域連携が欠かせない分野なので身近な問題として取りかかることができるだろうが、文系の学生に対してはなぜ地域なのか、将来やるであろう職業との関係で考えさせるなど、将来の方向性を含めて地域交流に関するモチベーションを上げていくことが肝要だろう。最近の学生は身近な両親、身近な人が地域でどのように暮らし、地域にどのような問題があると考えているのかという点に関心を持っている人が多い。それ故、親族が住んでいる地域の問題を取り上げ、考えるきっかけにするのもモチベーションをあげるためのアイデアのひとつであると思う。

羽村市、三鷹市、八王子市で展開する事業を介して学生たちが地域と交流するということの経験を積んでいることは素晴らしい。大学が持つ知識、学生・教員の発想・行動力が地域の活性化にいかされることを経験することで、大学の価値を実感できる事業となっていると思う。「地域と大学」の授業で市職員が講義を受け持つ取り組みによりプレゼン能力のアップにもつながっていると思う。今後は実際に地域からの学びを開始した学生達の学年が上がっていく過程の中で、より深いレベルで地域への取り組みに参加していくことができる仕組みを構築されることが望ましい。

第三者評価委員会の風景

第三者評価委員会での意見交換の様子

３．［研究］地域を志向した研究体制の構築促進と実績

公開講演会は学外への働きかけとして有効であったと考えられるうえ、杏林CCRC研究所セミナーを10回開催するなど、活発な活動がおこなわれていた。また、紀要に掲載されている冒頭５論文は少子高齢社会というわが国が直面する課題を扱い研究成果をあげている。

アカデミアのスタンスとして地域の問題をどう発掘するのか。研究とも関わってくることだと思うがその点をどうされるのか、事業の効果判定をどのようにされるのかが見えてこないところがある。効果判定を行うために行政が実施する調査に大学が協力するなどのことがあってもよいので検討してほしい。本事業を通して、各自治体の医療政策や保健政策、各自治体が抱えている地域の問題の解決をサポートするといったことも杏林大学の一つの役割であるということが、大学にも自治体にも自然に受け入れられるようになるように努力してほしい。

国外での研究調査、他大学訪問などを行っているが、本事業との関係で、研究成果をどのように整理し、どのように活かされようとしているのか読み取れなかった部分があった。

４．［社会貢献］杏林CCRCに即した社会貢献活動の促進と実績

「健康寿命延伸」等３分野で14本の社会貢献活動が実施されており、事業としては着実に前進している。そうした社会貢献活動によりどのように地域が活性したのかなど効果をどのように判定し、さらなる改善を図るかという部分は今後の課題となるだろう。計量的判断は難しいと思うが、病院と地域、大学教育と地域を結ぶ視点を取り入れてみてはどうだろう。実際に活動に参加した地域の方々から声を聞くと、例えば大学教員から直接細かな指導が受けられる、学生と地域の商店主が議論できる場があることで若者の視点からの提案がされるなど好評である。短期的なものではなく長期的な視点に立った取り組みをしていただきたい。またキャンパス移転がどの程度影響するかは分からないが、現状を維持して活動していただきたい。市民への賦活活動は継続して行っていく必要がある。

生きがいづくりコーディネーターについて受講者が少ないのは何が悪いのか、広報の仕方やプログラムの問題なのか分析が必要なのではないか。移転によってロケーションの課題は解消されると思うが、井の頭キャンパスへの移転を契機に改めて考察し、内容と開講時間のバランスを検討してみる必要がある。病院でのボランティアを専門職の知識にとらわれない幅広い見識を持った生きがいづくりコーディネーター課程修了者に任せてもいいのではないか。病院と各機関を結ぶコーディネーターとして患者目線で対応できる。その他、生きがいになるような役割、例えば防災リーダー、教育ボランティア等の資格を与えるということも今後の検討課題になるだろう。

生きがいづくりコーディネーターの受講が修了したことがメリットとなるような体制が構築されることが望ましい。また、地域で生きがいづくりコーディネーターをどのように活用していくのかを考えることも必要である。

情報発信のためにウェブサイトの多言語での作成は、地域や大学の国際化に対応するという意味ではこれからの大事な仕事となる。外国語学部は、このような仕事も分担し、外国語学部のあることの価値を高めていくことが必要であると思う。

出張報告　国内①

「地（知）の拠点整備事業」の訪問調査

■日　程：平成27年12月１日（火）～12月２日（水）
■訪問者：古本　泰之（地域交流推進室 室長）
　　太田ひろみ（保健学部教授）
　　井上　晶子（地域・大学間コーディネーター）
　　依田　千春（地域交流課課長）

■目　　的

本事業では、都市型高齢社会の課題を解決するフレーム（大学が参与する）を構築することをその目的としている。

今回の訪問先の一つである岩手大学は、本学と同時期の平成25年度にCOC事業に採択された後、今年度のCOC+に申請し採択された。今後の連携についての詳細の打ち合わせを行うため岩手大学上田キャンパスの地域連携推進センター長をはじめとする関係教職員との有意義な意見交換を行う。また、本学と同じく大学COC事業採択校であり、コーディネーターを利用した事業展開を行っている福島大学を訪問し、コーディネーターの取組事例を参考にしたいと考え、意見交換・情報収集のために出張を行う。加えて12の自治体と連携し、連携自治体担当者会議等を開催している仕組み、運用などの話を参考にしたい。

■出張日程

12月１日（火）　岩手大学
12月２日（水）　福島大学

■出張内容

①岩手大学

12月１日には岩手大学を訪問し、同大学のCOC事業コーディネーター、教育推進機構の教授、特任准教授、学務部教務企画課、地域連携推進課の方々からCOC事業の教育・PBL型教育、インターンシップなどについてヒアリングを行った。その中では、岩手大学から本学との連携の提案もあった。さらに、学生の活動費用、ボランティア活動、自治体からの地域貢献活動の依頼、本学に求めることなどについての質疑応答も行った。

②福島大学

12月２日には福島大学を訪問し、同大学のふくしま未来学推進室の室長、実施責任者、地域コーディネーターなどの方々から、学生の地域志向科目として開講している「ふくしま未来学」を中心とした教育や、地域志向教育研究と地域活動支援などについてヒアリングを行った。その中では、「みらいバス」と名付けた１日バスツアーを企画し、学生に地域に出て行ってもらい、地域の魅力を再発見してもらう機会を提供していることも紹介された。また、地域活動費用の支援、地域活動への関わり方、学内での周知方法などについて質疑応答を行った。

■成　　果

両大学では、COC＋を展開していくうえで、全学的に動けるキーパーソンとなる事務職（ないしは産官学連携に特化した教員）を置き、そこに地域とのコーディネーションを含めた権限を与える体制を構築している。これは、本学の今後について参考となった。また、両大学では一定の教員しか事業に参加しないこと、研究申請者が同じ教員に偏ること、学生の参加数を増やすことが課題になっていたが、それらを解決するための方法として「活動の見える化」「情報発信」を積極的行うことが効果的であるという点も参考になった。岩手大学では、地域で学んだことをゼミ研究課題にしたり、学生が卒業論文・修士論文テーマを目標にして取り組む際には、研究費等を支援する体制を取り入れることを計画している。福島大学では、各教員に研究や社会貢献での成果を活かした新たな授業科目を立ち上げることを求めている。こうしたことは、本学にとっても検討に値する課題だという認識を持つことができた。

意見交換と質疑応答（岩手大学）

福島大学構内

ヒヤリングと意見交換（福島大学）

出張報告　国内②

「COC／COC＋全国シンポジウム」への参加

■日　程：平成28年２月28日（日）～29日（月）
■訪問者：蒲生　　忍（杏林CCRC研究所 所長）
　　相見　祐輝（杏林CCRC研究所 特任助教）
　　松井　孝太（杏林CCRC研究所 特任助教）

■目　　的

高知大学主催の全国ネットワーク化事業・平成27年度COC／COC＋全国シンポジウム「大学改革と機能別分化～地域における大学の存在意義の高まりと将来のあり方～」への参加し、さらに高知大学と意見交換をする。

■出張日程

２月28日（日）　シンポジウムへの参加
２月29日（月）　高知大学朝倉キャンパス地域連携推進センターを訪問

■出張内容

①全国ネットワーク化事業・平成27年度 COC／COC＋全国シンポジウム「大学改革と機能別分化～地域における大学の存在意義の高まりと将来のあり方～」への参加。

28日のシンポジウムでは、まず主催大学である高知大学の脇口宏学長が開会の挨拶を行い、次いで文部科学省高等教育局大学振興課課長の塩見みづ枝氏と高知県知事の尾崎正直氏が挨拶を述べられた。続いて、明治大学農学部教授の小田切徳美氏が「地方創生と大学の役割」と題する基調講演を行った。

パネルディスカッションでは、「まち」、「ひと」、「しごと」という３つの分科会に分かれてディスカッションが行われた。その中で、本学CCRC研究所所長の蒲生は「まち」分科会にパネリストして登壇し、「杏林CCRC：都市型高齢社会の健康と安心を目指して」と題する報告を行った。

その報告の中では、本学が教育機関・研究機関・医療機関としての側面を併せ持っており、COC事業では本学と地域社会の知の統合拠点Center for Comprehensive Regional Collaboration（杏林CCRC）の確立を目的に、「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」「生きがい創出」を３本柱とする活動に取り組んでいることが紹介された。そして、その報告に対しては米国のCCRC（Continuing Care Retirement Community）と杏林CCRCの関係性や、地域の高齢者の健康づくりに関する本学の取り組みについて質問が寄せられた。

その他にシンポジウムでは、地方創生における大学の役割、文部科学省によるCOC／COC＋事業の現状と今後想定される展開、各地で進められている「日本版CCRC」の取り組み等に関して情報収集を行った。

②地域推進センターへの訪問

29日は、高知大学のCOC事業関係者と、両大学のCOC事業の取り組みについて意見交換を行うため、高知大学朝倉キャンパス地域連携推進センターを訪問した。意見交換会では、はじめに高知大学のCOC事業「高知大学インサイド・コミュニティ・システム（KICS）」の概要と、高知県東部地域での具体的な取り組みについて説明を受けた。続いて、本学COC事業の取り組みについて、蒲生を中心に説明を行った。

その後、両大学の取り組みに関する質疑応答および意見交換と、今後の協力の可能性について議論が行われた。

■成　　果

成果として以下の論文をまとめた。

1．蒲生忍：都市型超高齢社会の健康と安心を目指した杏林大学の取組－医療人材の育成の重要性－．平成27年度杏林CCRC研究所紀要　5-18，2016.
2．松井孝太：米国CCRCと「日本版CCRC」構想．平成27年度杏林CCRC研究所紀要　34-42，2016.

公開講演会・公開講座

公開講演会の様子

本学では平成27年度において、大学が持つ知的資源をより広く地域住民に還元するため、地（知）の拠点整備事業のテーマである「生きがい創出」「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」に関連したテーマの他、知識や教養に結びつく多数の公開講演会を実施しました。本学三鷹キャンパスのほか、三鷹市・三鷹ネットワーク大学、羽村市・生涯学習センターゆとろぎ、八王子市・八王子学園都市センターを会場として、計51回開催しましたが、いずれの講演会にも多数の聴講者が来場し、おおむね好意的な評価が寄せられました。

本学では今後も、総合大学ならではの有意義な内容の公開講演会を開催する予定ですので、気軽にご参加ください。予約は不要です。

平成27年度公開講演会（平成27年５月～平成28年２月実施講座）

1	平成27年 5月９日（土） 14:00-15:30	脳卒中治療・予防 そしてリハビリテーション	医学部教授　平野 照之 医学部講師　山田 深	三鷹 ネットワーク大学
2	5月16日（土） 14:00-15:30	こんなに怖い、糖尿病性足病変 ～一生じぶんの足で歩くために	保健学部教授　大浦 紀彦	三鷹 ネットワーク大学
3	5月23日（土） 14:00-15:30	動悸、息切れ、胸痛、失神 あなたはどんなとき医者にかかりますか？	医学部教授　吉野 秀朗	三鷹 ネットワーク大学
4	5月30日（土） 14:00-15:30	熱中症と低体温症 ～何に注意し、どのように対処する？～	保健学部教授　和田 貴子	三鷹 ネットワーク大学
5	6月10日（水） 13:30-15:00	介護予防とリハビリテーション ～呼吸法も取り入れた運動療法の実践	保健学部講師　一場 友実	八王子 学園都市センター
6	6月13日（土） 14:00-15:30	私たちの暮らしと世界のつながり	総合政策学部准教授　川村 真理	三鷹 ネットワーク大学
7	9月5日（土） 13:30-15:00	秋の夜長の睡眠法	医学部教授　古賀 良彦	羽村市ゆとろぎ

こんなに怖い、糖尿病性足病変の会場

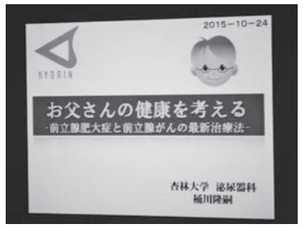
どんなとき医者にかかりますか 会場風景

熱中症と低体温症の講演

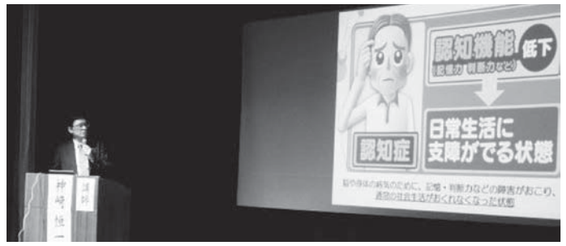
介護予防とリハビリテーション講演の風景

8	9月12日（土） 14:00-15:30	これからの女性の生き方 日・米の暮らしを体験して	外国語学部教授　坂本 ロビン	三鷹 ネットワーク大学
9	10月3日（土） 13:30-15:00	もしもあなたがコンビニエンスストアを 開業するとしたら？	総合政策学部講師　加藤 拓	八王子 学園都市センター
10	10月8日（木） 18:00-19:30	文明論から見た西欧	外国語学部客員教授　上野 景文	八王子 学園都市センター
11	10月17日（土） 14:00-15:30	高齢者のアルコールとの上手な付き合い方 ～アルコール性認知症について	医学部非常勤講師　松井 敏史	三鷹 ネットワーク大学
12	10月24日（土） 13:30-15:00	お父さんの健康を考える ～前立腺肥大症・前立腺がんの最新治療法	医学部教授　桶川 隆嗣	八王子 学園都市センター
13	10月31日（土） 14:00-15:30	社会言語学の魅力に迫る！	外国語学部准教授　八木橋 宏勇	三鷹 ネットワーク大学
14	11月11日（水） 13:00-14:30	認知症を考える ～症状・治療・予防	医学部教授　神﨑 恒一	羽村市 コミュニティ センター
15	11月12日（木） 18:00-19:30	これって病気？ ～抜け毛のしくみとその異常	医学部教授　大山 学	三鷹キャンパス 大学院講堂
16	11月21日（土） 13:00-15:00	女性の医学	医学部教授　小林 陽一 医学部准教授　古川 誠志	三鷹キャンパス 第一講堂
17	11月27日（金） 18:00-19:30	言語と認識	外国語学部教授　玉村 禎郎	八王子 学園都市センター
18	11月28日（土） 13:30-15:00	ピロリ菌を除菌してきれいな胃を取り戻 そう	医学部教授　高橋 信一	三鷹キャンパス 臨床講堂
19	12月5日（土） 13:30-15:00	これだけは知っておきたい感染症の基礎 知識：インフルエンザと肺炎について	医学部教授　滝澤 始	三鷹キャンパス 大学院講堂
20	12月19日（土） 13:30-15:00	がんと遺伝子 乳がんからひも解く病気と治療	医学部教授　井本 滋	三鷹キャンパス 大学院講堂
21	平成28年 2月6日（土） 13:30-15:00	米国のシニアアクティブライフ	外国語学部教授　坂本 ロビン	羽村市ゆとろぎ

これからの女性の生き方を考える講演の様子



お父さんの健康
前立腺がんの最新治療法の講演



認知症を考える講演風景

平成27年度八王子学園都市大学・いちょう塾　前期講座（平成27年４月～平成27年８月実施講座）

1	平成27年 ４月７日～７月21日 （各火曜日）15回	10:40-12:10	国際貿易論Ⅰ ～やさしい国際貿易～	総合政策学部教授　小野田 欣也	杏林大学 八王子キャンパス
2	４月９日～５月14日 （各木曜日）５回	10:20-11:50	そのまま使える個人事業者のための実践簿記【基礎編】 ～複式簿記を学んで自分で申告しよう！～	総合政策学部元教授　千葉 洋	八王子市 学園都市センター
3	４月９日～６月18日 （各木曜日）５回	18:40-20:10	国際化時代の日本語の言語・文化	外国語学部教授　玉村 禎郎 外国語学部准教授　鄭 英淑 国際交流基金元日本語専門員主任　松井 嘉和 国際交流基金日本研究・知的交流部　坂本 尚子	八王子市 学園都市センター
4	４月10日～７月10日 （各木曜日）５回	18:30-20:00	音声・音韻と文字・表記	外国語学部、大学院国際協力研究科教授　玉村 禎郎	八王子市 学園都市センター
5	４月18日～６月27日 （各土曜日）10回	13:30-15:00	古今悪女譚 ～中国『烈女伝』、近世小説『好色五人女』より～	前外国語学部教授　草場 裕 明治大学非常勤講師　永井 弥人	八王子市 学園都市センター
6	４月18日～７月９日 （各土曜日）10回	15:20-16:50	近世小説の世界 ～井原西鶴の『好色一代男』を読む～	前外国語学部教授　草場 裕	八王子市 学園都市センター
7	５月13日～６月17日 （各水曜日）５回	10:20-11:50	障がいを持つ人の生活とリハビリテーション・作業療法	保健学部教授　下田 信明	八王子市 学園都市センター
8	５月14日～７月９日 （各木曜日）７回	13:30-15:00	シェイクスピアの世界（13） ～『お気に召すまま』に見る愛の諸相～	前外国語学部教授　川地 美子	八王子市 学園都市センター
9	５月28日～６月25日 （各木曜日）５回	10:20-11:50	そのまま使える個人事業者のための実践簿記【実施編】 ～複式簿記を学んで自分で申告しよう！～	総合政策学部教授　千葉 洋	八王子市 学園都市センター
10	６月４日～６月18日 （各木曜日）３回	15:20-16:50	いちから分かるシェイクスピア	前外国語学部元教授　川地 美子	八王子市 学園都市センター
11	６月27日～７月11日 （各火曜日）３回	15:20-16:50	アロマテラピー基礎講座（６月開講講座） ～エッセンシャルオイルを用いたリラクセーション～	保健学部講師　西村 伸大	八王子市 学園都市センター
12	６月11日～７月23日 （各木曜日）５回	19:00-20:30	言語学の世界Ⅱ	外国語学部、大学院国際協力研究科教授　玉村 禎郎	八王子市 学園都市センター
13	７月１日～７月15日 （各水曜日）３回	13:30-15:00	高齢者のための運動のポイント ～いつまでも健やかであるために～	保健学部准教授　榎本 雪絵	八王子市 学園都市センター
14	７月18日～８月８日 （各土曜日）３回	15:20-16:50	アロマテラピー基礎講座（７月開講講座） ～エッセンシャルオイルを用いたリラクセーション～	保健学部講師　西村 伸大	八王子市 学園都市センター

平成27年度八王子学園都市大学・いちょう塾　後期講座（平成27年９月～平成28年３月実施講座）

1	９月15日～１月12日 （各火曜日）15回	10:40-12:10	国際貿易論Ⅱ ～やさしい日本貿易～	総合政策学部　小野田 欣也	杏林大学 八王子キャンパス
2	９月18日～１月15日 （各金曜日）15回	９:00-10:30	法学～日本国憲法～	総合政策学部准教授　岩隈 道洋	杏林大学 八王子キャンパス
3	９月30日～10月28日 （各水曜日）３回	10:20-11:50	心と身体のメカニズム ～役立つストレスマネジメント～	保健学部健康福祉学科　准教授 松井 知子	八王子市 学園都市センター
4	９月30日～１月13日 （各水曜日）７回	19:20-20:50	言葉を紡ぐ～歌詞の世界～	外国語学部教授　玉村 禎郎 准教授　鄭 英淑 准教授　八木橋 宏勇 非常勤講師　長谷川 明香	八王子市 学園都市センター
5	10月１日～10月29日 （各木曜日）５回	10:20-11:50	終末期医療を法律学の視点から考えてみよう ～安心して老いるために～	総合政策学部教授　橋本 雄太郎	八王子市 学園都市センター
6	10月８日～11月５日 （各木曜日）５回	10:20-11:50	そのまま使える個人事業者のための実践簿記［基礎編］ ～複式簿記を学んで自分で申告しよう！～	杏林大学名誉教授　千葉 洋	八王子市 学園都市センター
7	10月８日～11月５日 （各木曜日）５回	10:20-11:50	認知症のケアとリハビリテーション・作業療法	保健学部作業療法学科教授 下田 信明	八王子市 学園都市センター
8	10月15日～12月10日 （各木曜日）７回	13:30-15:00	シェイクスピアの世界（14） ～『じゃじゃ馬馴らし』を読み解く～	前外国語学部教授　川地 美子	八王子市 学園都市センター
9	10月22日～11月５日 （各木曜日）３回	15:20-16:50	いちから分かるシェイクスピア	前外国語学部教授　川地 美子	八王子市 学園都市センター
10	10月22日～11月５日 （各木曜日）３回	18:00-19:30	バチカン―その聖と俗を探る ～日本大使の一四〇〇日～	外国語学部客員教授　上野 景文	八王子市 学園都市センター
11	11月14日～２月６日 （各土曜日）10回	13:30-15:00	古今悪女譚 ～中国古典『列女伝』、近世小説『好色五人女』より～	前外国語学部教授　草場 裕 明治大学非常勤講師　永井 弥人	八王子市 学園都市センター
12	11月14日～２月６日 （各土曜日）10回	15:20-16:50	近世小説の世界 ～井原西鶴の『好色一代男』を読む～	前外国語学部教授　草場 裕	八王子市 学園都市センター
13	11月17日～12月15日 （各火曜日）５回	13:30-15:00	高齢者の健やかな生活のための運動とリハビリテーション ～介護の必要がない日常生活のために～	保健学部理学療法学科講師 橋立 博幸	八王子市 学園都市センター
14	11月19日～12月17日 （各木曜日）５回	10:20-11:50	そのまま使える個人事業者のための実践簿記［実践編］ ～複式簿記を学んで自分で申告しよう！～	杏林大学名誉教授　千葉 洋	八王子市 学園都市センター
15	11月20日～12月11日 （各金曜日）３回	15:20-16:50	人体の成分－生化学 ～化学物質として分解と合成、その食べ物は？～	保健学部救命救急学科教授 島 幸夫	八王子市 学園都市センター
16	平成28年 ２月５日～３月25日 （各金曜日）７回	15:20-16:50	やさしく学ぶ簿記の初歩	総合政策学部教授　原田 奈々子 教授　内藤 高雄 准教授　高田 京子 前非常勤講師　三澤 清	八王子市 学園都市センター

新聞記事紹介

■平成27年11月25日　ジャパンタイムズ

The Japan News by The Yomiuri Shimbun

Edition 5 Wednesday, November 25, 2015 11

New Japan, Old Japan

Visitors from abroad and other participants enjoy a variety of entertainment with geisha from nearby Hachioji.

The shrine town where the geisha night is held is at a high altitude.

Foreign tourists put on traditional Japanese armor. Visitors can wear samurai helmets as well as originally kosen (Japanese children's) City on May 5, if they spend the night at an inn on the mountain.

Geisha 'night' at Mt. Mitake

By Kristin Iwasaki
Yomiuri Shimbun Photographer

Mount Mitake in Ome is one of the most sacred mountains in Tokyo, together with Mt. Takao in Hachioji. Mitsuki Mitake Shrine, founded more than 1,200 years ago, stands at its top. Located about 40 kilometers west of central Tokyo, the shrine is surrounded by mountains above sea level. Reaching the town takes about 2½ hours by a combination of trains, bus and cable car, plus another 30 minutes or so on foot.

The area around the shrine can only be traversed by minivan or motorcycle along a narrow road, or by cable car.

About 150 people in about 30 households live in the shrine town, running businesses such as guesthouses and souvenir shops. An event named "Tenku [Celestial] — Geisha Night" began there last year.

The event has two parts, each about an hour long. In the first part, geisha perform traditional dances in a closed outdoor dance accompanied by shamisen, a three-stringed musical instrument, on a special outdoor stage. The show is free of charge and reservations are not needed.

Participants in the second part can experience a geisha party, drinking sake in the hall of a nearby guesthouse. Reservations are needed for this portion, which costs ¥5,000 per person. Organizers include Ochanomizu University's Faculty of Intercultural Studies in Hachioji support for the event by interpreting and conducting a survey among foreign participants in English.

Despite the "night" in its name, the event ends at 5 p.m., in consideration of the last bus that leaves the mountain.

Mount Mitsuki Shrine has been the base for worship of the mountain since the Heian period (from 794 to the late 12th century). Ordinary people began traveling to visit temples and shrines in the Edo period (1603–1867), and the shrine town became crowded with people who came from areas throughout the Kanto region to wish for a good harvest.

Since then, however, the number of visitors has been decreasing due to reasons including the aging population. This has also created a drop in the number of those who stay at the town's guesthouses. Concerns are being expressed over such issues as who will carry on the local festivals.

The town's local shopping association started the geisha event as a part of efforts to revitalize the area and traditional culture, aiming to attract the foreign tourists expected to visit the nation for the 2020 Tokyo Olympics and Paralympics.

Nearby Hachioji is known as the city of sculleries because it thrived on silk cultivation and the weaving industry. The city has the largest hanamachi entertainment district, dating back to the Meiji period (1868–1912), in the Tokyo area, after Kyoto's Gion.

With the number of geisha decreasing, the local geisha association is seeking opportunities to restore its traditions and readily agreed to cooperate in the project. Geisha visit the town each time the event is held, leaving for it's hours be somewhere and cabs can.

The next event will be held from 6:30 p.m. on Saturday, December 26 (rain or shine). Tickets are ¥5,000 per person, and can be reserved by calling 042-530-8009. Tickets are available at the Tokyo shopping district grand prix by the Tokyo government's Industrial and Labor Bureau this month.

Over 1,000 reservations have been held three times from September to November, with 1,0 participating 39 foreign visitors. This year's final event scheduled for Friday. The geisha night is planned held next year as well.

Sachi O'Connor has been in Japan for about a and came from the U.S. military's Yokota Air Ba Tokyo. She said, "I've been to Japan for 10 years, first time to see the geisha, and I thought it was exciting and entertaining." O'Connor said.

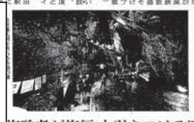
(Photos within Nos. 11 or 18: Hiroko in Ome.)

Geisha pose for tourists on a path to Musashi Mitake Shrine.

神秘・奥多摩 外国客呼び込め

信仰の地 御岳山

山頂付近 天空で「お座敷遊び」



日原鍾乳洞

修験者が修行 人引きつける歴史

好アクセスの場所
自然豊富で魅力的

奥多摩流 外国人オモテナシ

信仰・修行の地 五輪見据え集客に

御岳山 芸者舞い踊る

トイレなど標識改善を

鍾乳洞活用策 自治体がサミット

■平成27年10月27日　朝日新聞

■平成28年 3 月18日　日本経済新聞

セッション 高齢化社会と地方創生～日本版CCRCを考える～

自治体講演

南魚沼版CCRC構想について

新潟県南魚沼市 市長 井口 一郎 氏

医療を核にシニア移住

南魚沼市にシニア向けスキーを住むよる構想で知られる南魚沼市は、豪雪地帯を逆手に取って雪国暮らしの魅力を発信している。

自治体講演

笠間版CCRC 生涯活躍のまちへの挑戦

茨城県笠間市 市長 山口 伸樹 氏

2 地域居住から移住を促す

自治体講演

八幡平市版CCRCの挑戦

岩手県八幡平市 市長 田村 正彦 氏

経験生かし、ビジネスを創出

大学講演

杏林CCRC・都市型高齢社会 健康と安心を目指して

杏林大学 杏林CCRC研究所 所長 蒲生 忍 氏

地域医療に役立つ人材育成

日経 地方創生フォーラム

メッセージ

官民連携と地域連携で実現する地方創生

～人材流動化、地域エネルギーシステム、ヘルスケア、新産業創造が生み出す経済循環～

超高齢化、人口減少といった課題解決に向け、地方自治体では企業や大学などとの連携・協力で、地域産業の活性化と雇用力強化による雇用創出を図っている。2 月 24 日に行われた日経地方創生フォーラムでは日本版 CCRC（継続的なケアを受けられる高齢者居住地域）をはじめ、人材の流動化と有効活用、地域エネルギーシステム等をテーマに活発な意見交換が行われた。

主催：日本経済新聞社
後援：内閣府 総務省
協賛：日本公認会計士協会 住友化学 TWR ヤマトホールディングス スマートウエルネスコミュニティ 慶応中央会議 パソナ 横浜市立大学 OKI 吉林大学 PwC Japan

基調講演

地方創生で日本を変えよう

東京大学公共政策大学院 客員教授 前内閣府副大臣 増田 寛也 氏

セッション 地域連携で実現する地方創生

大学における超高齢社会に対応した地域課題解決の取り組み

横浜市立大学 国際総合科学部 教授 鈴木 伸治 氏

全体俯瞰し、解決策導け

連携で実現する地域エネルギービジネス

東京工業大学 特命教授 柏木 孝夫 氏

社会的課題解決を目指す＋ d の挑戦

～農業の現場で活用されるモバイルネットワークとビッグデータ～

NTT レゾナント 新産業推進室 第二営業推進部 部長 山田 広之 氏

7つの改革で新モデル

大学講演

杏林CCRC・都市型高齢社会の健康と安心を目指して

杏林大学
杏林CCRC研究所 所長 蒲生 忍 氏

地域医療に役立つ人材育成

東京都三鷹市に本部を置く杏林大学は4学部、学部生約4500人の中規模大学だ。教育機関と同時に医療機関でもあり、付属病院は都西部地区唯一の特定機能病院と高度救命救急センターに指定されていて、同地区の中核的医療センターの役割を担っている。

現在、日本が置かれている社会状況だが、日本人は世界的に見ても間違いなく長寿で健康だといえる。さらには予防医学の発展で日常生活を制限なく送れる健康寿命も延びている。とりわけ東京圏は急速な高齢化が進み、将来は介護施設不足が深刻化する恐れがある。

米国では現在、約70万人の高齢者が約200あるCCRCに居住している。CCRCの入居者家族を対象にした全米調査では、入居の理由に「医療・介護ニーズが変化しても同じコミュニティーで生活を続けられる」「新たな人々と交流を持つ機会」と回答した割合が非常に高かった。

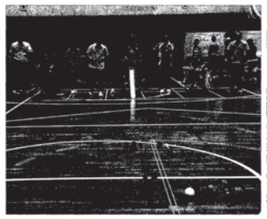
これらのことを踏まえたうえで、杏林大学では「杏林CCRC」を掲げている。CCRCを「大学と地域社会の知の融合拠点」と定義し、教育機関として地域医療に貢献する人材育成や地域志向型の教育などを進める。

一連の取り組みを通じ、今後も地域社会との連携を強めていきたい。

■平成27年11月20日　毎日新聞

障害者スポーツ「ボッチャ」

パラリンピック公式種目　杏林大で講習会・体験会



選手の指導を受けながら、ボッチャの試合を楽しむ学生と地域住民。右の車いすの選手が広瀬さん＝杏林大三鷹キャンパスの体育館で

2020年の東京五輪・パラリンピックに向けて、競技への関心が高まる中、車いすバスケットボールやブラインドサッカーなど、障害者スポーツも注目を集めている。その魅力を知ってもらおうと、東京都三鷹市でボッチャに関するイベントが開催された。【加藤大・日置陽斗、写真も】

ボッチャは、重度脳性まひなどの運動障害のある人たちのために開発された、日本でも知名度が高まっている競技。6人ずつ2チームに分かれ、赤と青のボールを交互に投げ合い、ジャックボールと呼ばれる白い目標球にどれだけ近づけるかを競う。1対1で争う個人戦や、2人1組のペア戦もある。

イベントは、杏林大三鷹キャンパスの体育館で開かれ、市内の小学生から大人まで約50人が参加した。

ボッチャは、カーリングと共に日本選手が出場するパラリンピック伝統競技の一つ。ルールを知らない参加者のために、日本ボッチャ協会の広瀬格理事長（50）が、「ボールを投げる時は、ジャックボールに当てるイメージで」などと説明した。

参加者のチームは、障害者スポーツ用具メーカーの社員や、健常者の大学生ボランティアらで構成。1試合4エンドで争われ、1エンドごとに両チームが6球ずつボールを投げ入れる。ボールがジャックボールに近いほど得点が高くなるが、相手のボールを弾き飛ばすなどの妨害も認められており、試合は白熱した。

広瀬さんは「ボールを投げる時の力加減や、ボールの転がり方など、奥が深い競技。ルールを知らない人でも、すぐに楽しめる」と話した。

人を選ばない競技の魅力

参加者の中には、車いすバスケットボールの元日本代表選手で、2016年リオデジャネイロ大会にも出場した藤本怜央さん（25）＝東京都＝の姿もあった。藤本さんは「ボールを投げるだけなので、車いすバスケットボールよりも障害の重い人が参加しやすい。ルールも簡単で、誰でも楽しめる競技」と魅力を語った。

学生11人が公認上級審判

（略）

■平成27年11月１日　朝日新聞

パラリンピック種目

「ボッチャ」日本代表が伝授

ボッチャを楽しむ日本代表選手と都知事＝三鷹市の杏林大

三鷹市の杏林大学で31日、パラリンピック正式種目「ボッチャ」の日本代表選手を招いた競技体験会があり、学生や地域住民ら約50人が参加した。

ボッチャはカーリングと似たルールで、白い目標球に向かって赤と青の球を投げたり転がしたりして、得点を競う。

この日は、北京、ロンドン・パラリンピックに3大会連続で出場した広瀬隆喜さん（50）ら選手5人が講師役に。広瀬さんは「健常者やお年寄りも楽しめる競技。もっと知ってもらえるようパラリンピックに絡めたい」。ボッチャ初体験の狛江市の大学3年、日高就彦さん（20）は「ボールは思ったよりもずっしり重くて、あまり転がらなかった」と話した。（坂本進）

■平成28年３月27日　岩手新聞

当大学外国語学部 4年　山﨑圭太さん

■平成28年４月８日　朝日新聞

学生狙うSNS悪質商法

八王子市や大学、注意呼びかけ

「学園都市」八王子市の大学生がSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）などインターネットを使った悪質商法の被害に遭う相談事例が増えている。自治体や大学が注意を呼びかけている。

工学院大の八王子キャンパスで4日に開かれた新入生ガイダンス。新入生は授業の履修方法などと共に、八王子市消費生活センターの職員からクリアファイルを受け取っていた。「SNSを通じて知り合った人に会ったことがある」、「迷惑メールの受信拒否設定をしていない」、「芸能事務所などを名乗られるとつい信用してしまう」。そんな質問が記されていた。

クリアファイルは昨秋、市内にキャンパスがある杏林大学の学生と同センターが協力して作成。携帯電話で読み取るQRコードをつけて詳細な情報を調べられる工夫をこらした。

過去にサークルを装ったマルチビジネスや宗教の勧誘が問題となったことから、入学シーズンは不審な勧誘がないか、職員がキャンパスを巡回する大学も多いが、大学関係者は「インターネットとなると把握できない」と話す。

同センターに寄せられる相談件数は減少傾向が続いていたが、2013、14年度は増加した。相談件数が前年度比7％増となった14年度を世代別に見ると、20代が19・5％増と最も高かった。

「学園都市」として多くの大学や短大、高専が集まる八王子市だけに、目立ったのはSNSを通じた大学生の被害だ。

「SNSで連絡があった女性とメールでやりとりをしているうちに有料サイトに誘われた」、「SNSで知り合った人からネットビジネスのセミナーに誘われ、DVD購入の契約をさせられた」といった相談があったほか、学生ローンや消費者金融に借金をするケースもあった。

同センターによると、いきなり勧誘されずにSNSを通じることで心理的な抵抗が減るなどの背景があり、就職活動で有利に働くことを理由に人脈や資格への関心が高い学生が被害に遭いやすいという。（加藤勇介）

心理的な抵抗感の薄さ背景

杏林大学八王子キャンパスでは昨秋、八王子市消費生活センターの職員と大学生が、トラブル防止を呼びかけたクリアファイルを配った＝同センター提供

■平成28年４月５日　読売新聞

杏林大生さん これが三鷹

商店会など「消費」獲得へマップ

25店取材　持参で値引き特典も

杏林大の学生が手がけた「三鷹市内まち歩きマップ」

杏林大・井の頭キャンパス（三鷹市と調布市）と三鷹市内の商店会連合会は、同大や三鷹市内の飲食店などを紹介する「三鷹市内まち歩きマップ」を6000部作成し、同日から配布を始めた。

井の頭キャンパスには、4月から保健、総合政策、外国語の3学部などが八王子キャンパス（八王子市）から移り、約3300人が学ぶようになった。地元と学生らに三鷹の街を知ってもらうとともに、学生らに市内店舗で消費してもらうことを目指して作成された。

学生16人による作成実行委員会が7月、飲食店や書店などの店舗を取材。店舗の外観や看板メニュー、間取りなどを紙面にまとめた。

一店主が答えてくれた「一人暮らしの人生の楽しい生き方」という口コミ情報も多い。学生の目線が反映されている。

持参すると割引などの特典もある。

掲載店には、学内やJR三鷹駅前のみたか観光案内所などで無料配布されている。

（3）　第２６０５号　（昭和30年３月28日第三種郵便物認可）　教育学術

知の拠点から

杏林大学

都市型高齢社会の課題解決に向けて

杏林ＣＣＲＣ研究所の取組

昨年十二月に閣議決定された「まち・ひと・しごと創生総合戦略（総合戦略）」では、東京からの地方移住の政策として日本版ＣＣＲＣ（Continuing Care Retirement Community）を検討するとしており、構想について有識者会議が発足している。そうした中で、地方への新たな人の流れを作るにあたり、大学等がコミュニティに参画することが期待される。都市部においても、高齢化社会の問題は同様であり、東京の杏林大学では、平成二十五年度に文部科学省の地（知）の拠点整備事業において、ＣＣＲＣ構築に取り組んでいる。都市型の課題に挑む、杏林ＣＣＲＣ研究所の蒲生　忍所長に取り組みを紹介していただく。

杏林大学の歴史は昭和四十一年、現在の三鷹キャンパスに臨床検査技師を養成する杏林学園短期大学が設立されたことに始まる。昭和四十五年には杏林大学医学部が、その後八王子キャンパスに保健学部、総合政策学部、外国語学部が相次いで開設された。建学の精神に「眞・善・美の探究」を掲げ、「優れた人格を持ち、人のために尽くすことの出来る」人材育成のための教育・研究・社会貢献活動を行っている。この間、医学研究科、保健学研究科、国際協力研究科の大学院研究科と医学部付属看護専門学校が併設され着実に発展を遂げ、現在は在学生数五〇〇〇名、教職員数三〇〇〇名を超える規模の総合大学となった。

杏林大学では、教育と研究と社会貢献の改革を進めるため、「世界で活躍するスマートでタフな日中英トライリンガル人材の育成」をテーマに平成二十四年度文部科学省グローバル人材育成（経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援）推進事業に応募し、採択された。

続いて、平成二十五年度には文部科学省の地（知）の拠点整備事業に「新しい都市型高齢社会における地域と大学の統合知の拠点」をテーマに三鷹市、八王子市に加え羽村市と連携して応募し、採択された。

地（知）の拠点整備事業とは「大学等が自治体を中心に地域社会と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学等を支援することで、課題解決に資する様々な人材や情報・技術が集まる、地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化を図ることを目的」としている。日本は世界に例を見ない少子高齢社会であり、都市集中型社会でもある。本学の地（知）の拠点事業で連携する三鷹市・八王子市・羽村市は首都圏の都市型少子高齢社会の中にあり、いずれも退職し地域に戻った団塊世代の健康、都心への若年層の回帰、コミュニケーションの希薄化等、それぞれに程度や構造は若干異なるが共通の課題を有している。健康な勤労者が便利な生活をおくるために膨張した都市は、必ずしも退職・高齢者の優しい居場所になるとは限らない。都市の豊富に見える資源を、高齢退職者向けに有機的に連携させることが一番の課題となる。今後の都市圏には圧倒的多数の地縁が乏しい高齢者が居住することになり、過疎ではあるが地縁社会の地方圏とは大きく異なる対応が必要である。特に少子高齢社会における医療と介護は日本全国に共通のテーマであり、全国的に様々な模索が進んでいる。

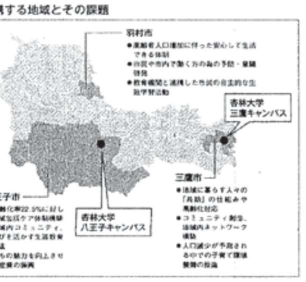
本学の事業は、今後の日本で最も深刻な課題である都市圏での団塊世代高齢化に対し、「地域に密着」し「医療」と「社会科学」の大学知の活用に焦点を絞るところに特色がある。東日本大震災以降、予期される関東地域での大災害に対する各自治体による対応策もその整備が急務となっている。本学の持つ教育と研究の資源、特に医療関連の資源は地域の拠点として大いに期待されるところである。即ち、本学のＣＯＣ事業の構想は首都圏近郊という立地から「都市型」社会の健康と安心」を重点的に取り組むべき地域課題と設定し、学生と地域関係者が共に学ぶ「生きがい創出」、退職団塊世代の「健康寿命延伸」、大規模自然災害に備える「災害に備えるまちづくり」の三テーマに基づいている。本学が中心となり教育・研究資源を動員し、連携三市に包括的な地域連携、杏林ＣＣＲＣ（Center for Comprehensive Regional Collaboration）を構築することを目指している。この中核として「杏林ＣＣＲＣ研究所」を三鷹市ＪＲ三鷹駅前に設置した。

ＣＣＲＣとは、元来、米国で提案された用語でContinuing Care Retirement Communityを意味し、退職世代に生活を楽しめる住環境を生涯にわたり継続的に提供する高齢者の集合住宅のモデルである。ＣＣＲＣへの移住時にはそれまでと変わらない生活ができるように自分の家具を持込むことも出来、移住後は新しいコミュニティの一員となる。生きがいを持って生活できるように施設内または連携した学習施設や娯楽施設での活動に参加し、高齢期に直面する健康問題にも介護から医療まで対応出来るコミュニティである。多様な母体が様々な契約形態で、広々とした敷地に戸建とコンドミニアムからなるものから高層住宅型まで、それぞれに特色ある施設やサービスを提供している。

米国と日本では介護や医療に関する保険制度が異なり、退職後に新しいコミュニティへ移住することへの抵抗もあることから、日本への導入には何らかの工夫が必要である。日本においては、今までの生活空間で老後を送るためのケアシステムの充実が図られており、異なる世代が共通の生活空間で生活することも望まれている。しかし、米国型ＣＣＲＣは高齢者のニーズに合わせた質の高い生活空間とケアサービスの提供がなされており、上手く日本型に改変することができれば都市圏が直面する高齢社会での有力な選択肢の一つとなる。

杏林ＣＣＲＣ研究所では米国ＣＣＲＣに詳しく日本版ＣＣＲＣを提唱している株式会社三菱総合研究所プラチナ社会研究センター主席研究員の松田智生氏を研究所の客員研究員に迎えて共同研究をすすめるのみならず、独自に米国ＣＣＲＣの調査研究も進めている。この研究成果については近く「杏林ＣＣＲＣ研究所紀要」として報告する予定である。また、ＣＯＣ事業の目的を実現する前提として大学の持つ知的資源を地域社会に周知すること、即ち「大学知の公開」が必要で、公開講演会等での情報提供を積極的に進めてきた。さらに連携自治体や関係団体との地域課題に関する意見交換を介して、「大学と地域の知と力の協働と統合」による地域課題解決を目指す地域志向教育研究にも取り組んでいる。今後、地域のニーズにあった情報提供に一層努めること、よりテーマ性を明確にした講演や講座を開設すること、さらに地域志向教育研究の成果を実際の地域貢献活動へと繋げていく予定である。

■連携する地域とその課題



杏林大学『平成25年度 地（知）の拠点整備事業成果報告書』より作成

本学がＣＯＣ事業において連携する三市においても、高齢者が住み慣れた地域で継続して健康に生活でき、生きがいを持って暮らせるまちづくりが大きな課題となっている。都市部では、人と人とのつながりが希薄となっており、つながりから生まれる生きがいを享受しづらい環境である。つながりの希薄さは地域の共助関係の脆弱さにもつながり、世代を超えた子育て支援や災害対策等を困難にしている。したがって、医療・介護・生活支援・在宅などのサービスをネットワーク化し、高齢者はもとより全世代の住民が生きがいを持って生活でき、かつ世代間のつながりを持たせる地域活性化、地域社会の再生もしくは「新しい地域社会の創造」が必要と考えられている。

本学は良医を育成する医学部、健康づくりを始めとして助産から高齢者のリハビリ・生活支援までを扱う保健学部、社会問題を俯瞰的視野で扱う総合政策学部、創造的なコミュニケーションとホスピタリティのプロを育成する外国語学部からなり、都市型高齢社会が抱える課題を解決する教育・研究・社会貢献を有している。本学のＣＯＣ事業は、米国のＣＣＲＣに学びつつ本学の知的資源と地域社会の知の統合、即ち杏林ＣＣＲＣを目指している。

杏林大学は平成二十六年度には文部科学省大学教育再生加速プログラム「高大接続」と科学技術人材育成費補助事業「女性研究者研究活動支援」に採択され、教育、研究、地域貢献のあらゆる面で改革の時期を迎えている。さらにこの改革を、次の五〇年、一〇〇年に向けた飛躍とするため、創立五〇周年を迎える二〇一六年に井の頭キャンパスを開設し、八王子キャンパスの学部・大学院を移転する。これを契機に全学的な教育連携を一層充実させ、医学・保健医療系と人文・社会科学系を併せ持つ大学の利点を生かし、グローバル教育、地域連携に一層力を入れていく予定である。